

司  
法  
大  
臣

書  
局



4/1  
342

77-344



かねて脚本に筆を着けて見たいと思つてゐました矢  
 先「國民新聞」の我が爲に舞臺を供せんといふ、これ  
 強、何れも古との不向見の大胆から耻も外聞も顧  
 るに違なく、試に書卸したのがこの一篇であります。  
 さて出来上つて見ると我ながら勞徒らに多く、功は  
 空しきに似たる不手際さを只管にかこつばかりであ  
 りますが、始めから長老にはなれぬもの、先づ初手の

明治  
 87 1 8  
 空

味増摺坊主も拙小本持つて三年の修業の甲羅を、手  
の掌の豆と握り堅めねばならぬと聞きましては、月  
日を薬に、鍛練と修養とて工夫の功を積んで飽くま  
で遣つて見たく、自ら身を後日に縛る繩として、この  
拙い作を謹んで江湖に捧げ、斯道経験の諸先輩の忠  
言を得、訓政を忝うしたのであります。

癸卯の冬、師走の中旬

本郷西片町の僑居に於て 著者 謹言



司法大臣目次

序 幕

(其一) 鬼頭邸城外の場 ..... 自第 三 頁

第 二 幕

(其一) 鬼頭邸園遊會の場 ..... 自第 四 〇 頁  
(其二) 全茶室の場 ..... 自第 六 五 頁

第 三 幕

(其一) 鎌倉河岸宿屋の場 ..... 自第 七 一 頁  
(其二) 關口瀧の場 ..... 自第 八 六 頁

第 四 幕



〇 第五幕

(其一) 鬼頭大臣居室の場……………頁九七頁  
(其二) 全門前の場……………頁一四五頁

(其一) 石澤邸後園の場……………頁一二二頁

(其二) 鎌倉河岸の場……………頁一四六頁

第六幕

(其一) 鬼頭邸葛藤の場……………頁一六二頁

(其二) 藤子自害の場……………頁二〇〇頁

第七幕

(其一) 夢の場……………頁二一九頁

(其二) 覺醒の場……………頁二三四頁

第八幕

谷中墓地の場……………頁二四五頁

第九幕

(其一) 築地慈恵病院受附の場……………頁二六五頁

(其二) 綾江臨終の場……………頁二七二頁

三 總目次 終

本脚 司法大臣

序 幕

中 村 春 雨

(其一) 鬼頭邸外の場

新聞號外賣「號外」  
 永店に腰掛けて、巻煙らし居たる三人の大学生、甲、「オイ號外呉れ  
 ツ、幾何？一錢！……オイ戀川君、拂つて置けツ……何んだ、國民黨内  
 閣は愈々其成立を見るに至り、今日午後一時、宮中に於て親任式を舉行  
 さるゝ事に決定し、其役割は豫報の如く左の人々なるべしと傳聞すか、

乙「何れ〜見せてくれ給へ、」  
 丙「到頭、野心家の天下になつちまつたのかなア、時事知るべし矣だ」

(甲) 讀み上げる。

内閣總理大臣兼外務大臣

伯爵

大垣安民

内務大臣

小崎文雄

大藏大臣

益田彰

司法大臣

鬼頭剛

農商務大臣

宅野榮

文部大臣

赤野龍術

逓信大臣

砂島進實

陸海軍大臣は舊の如しか、中には所謂、伴食宰相も居るが、小崎、鬼頭と、來たら先づ國民黨の切れ物だね、政界之より多事、人材登用の途も開けたと云ふもんだ、ア、愉快々々……オイ、君、僕が總理大臣、決して空想ではないぞ、見給へ、此所十年の中に、見ん事、我が法螺山内閣を組織して一番君等を擡かして遣るから、……その節、この法螺山總理大臣の官邸へ低頭平身して御歎願と出掛けたら、然うさ、戀川文學士

は先づ文部省視學官位には任用してやろうか、其方の藪岡醫學士は特に衛生局長に任ずるかな、但し月俸十八圓五十錢……」  
戀川「法螺山錢が内閣、放蕩學博士、大喰位、喰一等等なんかいふ素晴らしい肩書なら卒業前からもう疾に君の姓名の上へ附いて廻つて居るよ法科の學生なんか、人生の根本問題如何と云ふやうな事は一切上の空で虚位だの、人爵だの、要するに唯眼先に見える虹の様なものを握ろう、掴まうと悶きに悶いて、肝心の足元には少とも氣が附かれず、何時の間にか、墓場の穴の中へ墜落して、所謂醉生夢死に了るのだな、内閣組織が何んだい、賽の河原の石塔見た様に、積んだり頼したり、頼したり積んだりして、宛て子供の遊び事を演つてるのぢやアないか、そんな者は僕等の眼から見たら殆んど古靴程の價値もないね」  
法螺山「ア、そんな事を云つてるから文科の先生等は目出度と云ふんだ、學校に居る中は、やれ人生が蜻蜒返して運命が鯨鋒立になつた事、やれ教育で鉢巻をして、倫理て都を緊めると、勝手な熱を吹いて、高慢



チキな顔をしてるかと思へば、社會へ出ると百や二百の端金に眼が眩んで、それ、教科書事件なんかでぞろ／＼念珠繫ぎになつて、法律書生上りの司法官の前へ引張り出され、其方は、なんてさん／＼膏を取られて、蝦蟇の乾物見たやうに縮み上つて平伏つて居やがる様つたらないぢやないか、聖人君子の聲色許聞かすのなら當節は蓄音器で澤山だ、へん人は政治的動物也、男子生れて大臣たらずんば死して正に閻羅王たるべし」

戀川「そんな皮相な事許云つてるから法科の連中なんか話相手にはならな」

「のぞ」

法橋山「話相手にならなさやア始から黙つてすッ込んでゐる、君等如き政治の何者たるを解せない奴が吾輩の言に喙を容れるのは失敬だ」と杖に地を打つて怒鳴る。

政岡「ア、兩君、然う熱度が昇つて來ては困る、正に四十度といふ處だな、政岡ドクトル、熱々兩君の御容體を拜診するに、これは極端性、我田引水病と云ふ症候を呈してゐる、畢竟最前の氷汁粉が分量少くして

其効を奏せないと見えるから更に、アイスクリーム、〇・三、を投じたら全快疑ひなしだ、マア／＼暫らく此のドクトルに任せて置き給へ」手を鳴らして、アイスクリームを注文する。

水店の女主人「へい、何うも待遠さま……旦那、あの、唯今の號外で、愈々新内閣が出來ましたのでムいますか」

法橋山「ア、……、今日は親任式、鬼頭剛が愈々司法大臣に任ぜられた、僕

の同縣人、高知縣の出身だが、なか／＼羨い奴だ」

女主人「では、此處の御邸の殿様が愈々大臣にも成りなされたのでムりますか、それは何うも御目出度い事でムります」

法橋山「……見るも羨やましいやうなこんな大きな邸を構へて、今日は又司法大臣の顯職に上る、嚇得意満面だろうな、實際、君等、男子の腕を揮ふのは政治界に限るよ、鬼頭剛君の事は僕も善く聞いてゐるが、先生今から十二三年前までは、高知縣の片田舎で小學校の教師を遣つてゐたのが、夫が一朝奮然志を立て、上京していろ／＼苦學の末、さる法律

學校を卒業して辯護士と爲り、政黨に關係し始めてから、あの大垣伯の非常の信任を受けて性來の敏腕家見る中に嶄然頭角を露はして來る、洋航以來一層の利物になつて、遂には伯の媒介で日本一の富豪たる石澤家の婿君と成濟し、從來兎角反目嫉視してゐた急進黨と政友黨との中間に立つて、例の快腕を揮つて旨く兩派を聯合せしめ、危然たる大政黨、即ち今の國民黨の柱石と仰がれて今日あるに至つたのだ、司法大臣と云つても其實外務大臣を兼ねるやうなもので、今度の新内閣の實權は鬼頭一人の手に握つてるも同然だなんて、書立てゝる新聞もある位さ、豪い者ぢやないか」

女主人「へい、そんなに些との間に御出世なさつたのでムりますか、何うもお察い御方でムいますのねえ」

藤岡法螺山君も須らく富豪の婿君となつて、今から徐々内閣組織の下準備でも遣り給へな、君が志を得た曉には僕は海外留學の學資を拜借に出かけるよ、善いから、よろしく頼むよ」

法螺山「ア、海外留學の學資なんか譯は無いさ、君はそれ丈で善いのかい、醫者なんかの慾は小ぼけなもんだなア」

女主人「私も其節はよろしく願ひ申します、宅は焼芋屋を商賣にして居りますが、焼釜がもう毀れかけまして、何うも長くは使用まいと存じまするので、何うか新しいのを一つ購めたいと存じましてね……」

法螺山「ア、それはお安い御用だ、僅か五圓か、十圓だろう」

女主人「へい、左様でムいます、何なら旦那様、僅の事でムいますから、今茲て一つ先拂ひになさつて置いて下さると大さう都合が善ムいますか」

法螺山「馬鹿を云へ、今は持合せがない、十年先の事さ、内儀さん、なかなか喰へない代物だな、これなら外務大臣の臨時代理位命じるかも知れんぞアハハハハ」

女主人「ホ、何卒よろしく……」

戀川法螺山内閣の外務大臣には適當だろうな、時に法螺山君、その鬼頭剛君が高知縣から出京するに就けて、學資を送つて助けてくれた婦人が

あるとか云ふてはないか、反對黨の新聞が書立てるのだから實否は知らないが、鬼頭剛は其恩義ある婦人を捨て、石澤家の婿になつた忘恩不義の人非人などと悪口が叩いてあつたが、あれは何うだ、實際かね」

法「そんな事も一寸聞込んだ事がないではないが、所謂大功は細道を省みずさ、そんな小つぼけな穴を大袈裟に掘鑿立するのは、要するに小人の嫉妬だね」

巒併しそれが果して事實だとすれば、そんな血の通はない石か木か性の知れぬ者を我國の床の間に飾り附て大臣だなんて崇め奉るのは甚だ屑しとしなないね、そりやア、大功は細道を省みないかも知らんが、假令小い一點の曇でも瞳孔の真中にあつた日には白いも黒いも分らぬ盲目漢だ、ね、裁岡君然うだろ、恩義ある婦人を捨て、富豪の婿になつたりするやうな良心の疵痺した奴が一國の司法大臣だなんて、寧ろ石川五右衛門を日本銀行總裁に任ずるの優れるに若がすではないか」

法「そんな杓子定規を振廻したつて駄目だ、君なんか政治が分るものか、

生意氣な、黙つてゐろ」

巒「何か生意氣だ、失敬な」と立ちかゝる。

女主人と裁岡「まア、廢止給へ」と兩人を宥る。處へ海老茶式部の女學生三人、手にく號外を持つて讀みながら出て來、偶と目を附けて、

里「法螺山さん、オヤ、此處に居らしたつたの、餘程搜してたんだわ、新内閣組織が出来て萬歳ね」

乙「到頭、貴方の豫言通り、政黨内閣が出来ましたのね——」

丙「萬歳ね——」

法螺山「得意見給へ、此の次は僕の内閣が成立するのだよ、其時は玉川さんを令夫人、鍋田、大山兩君を婢に使つて上げる」

二人「あら、まア失敬ね——この人は……もう時間ですから英語を教へて頂戴よ」

法「サア來給へ、兩君、本大臣は御先へ失敬するよ」

女學生「では失禮しますよ」と皆々入る。

後に二人呆氣に取られながら氷代を拂ひて情々入る。

○獵官運動者、代議士 馬川鹿一（老年の禿頭）

酔ひしれながら車にて先へ來り、車夫を叱咤して往きつ戻りつうろくする、後より同、瓜田鈍作、車を驅りて追附く。

瓜田ヤア、馬川君ですか」と聲をかける。

馬川ヤア、これは瓜田君、我輩眼がちらついで瓜田君が八人に見えるわ、アハ、ハ、實は、吾輩、その鬼頭大臣の邸宅の門口を尋ねてゐるのだが、何處から入つたものか、さ、さッ張分らない、車夫は新參の田舎ッペイ、小生はチと前祝に食べ過ぎたもんだから、そ、その、道筋が入つになつたり、窻口が門口のやうに見えたりして、何うも分らん、君一つ教へてくれ給はんか、シッ、.....」

瓜ヤア、何うも大さう上機嫌ですな、私も折角、大臣の邸宅へ伺ふ處だから、それでは是から御同道しませう、何しろ、此度はお目出度い事で我輩萬歳ですな」

馬ば、ば、萬歳です、こんなお目出度い事はありませんな、そこで、その、お目出度序に吾輩も一つ、是非共そのお接伴に預りたいもので、拙者當年取つて六十三才、正にです、正に四十何年といふものを我輩の爲に盡して、財産もです、.....財産も何も彼も、叩き上げて了つて、殖えるものは借銭の利子許、と云つた様な次第ですから、こ、こんでこそは、汝れ、國務大臣をと思つて、いろく運動して見ましたが、皆若手連に先廻されて取られて了ひ、止むを得ん、役不足だが一番内閣書記官長をと思案しかへて、これから、その、鬼頭さんに御依頼に上る心算です、年功から云へば總理大臣になつても不足はないのですが、あまり人が善いもんだから、衆に馬鹿にされて.....今度こそ何うしても書記官長位にならんと國に居る癖に叱られます、前祝の酒錢も拂へなくなります.....」とおい／＼泣出す。

瓜ハ、ハ、又例の泣上戸が始まりましたな、まア馬川さん、然う取越苦勞するものでない、吾輩も一番、總務長官位には有附き度いと思つてゐ

るので、山林を賣る、田畑を賣る、家屋敷は二重抵當、三重抵當、前後凡そ三十年間も政黨へ注ぎ込みましたからな、もうそれ位の果報はあつても善い頃です、併し貴方は書記官長に、あの、書記官長にですか方が、ハ、ハ、ハ、ハ、これは餘つ程お目出度い」

馬「お目出度く行きませうかな……」と機嫌を直し、「眞實にお目出度く行きましたら、新橋邊で一番大に騒ぎませうかな」

馬「御馳走なら何日でも駐附けますから何卒御遠慮なく仰つて下さいまし」

馬「寧ろ頭割にしたが宜しいぢやありませんか、して貴方は何處の總務長官にお爲りなされるので？」

馬「外務省を視つてゐるのですが」

馬「ハ、ハ、ハ、ハ、外務なら横文字が讀めないといけなひではありませぬか」

馬「エ、横文字……横文字なんか、毛唐の文字は讀めないでも、幸私は四書五經など漢學に善く通じて居りますから支那、朝鮮と文書の往復に差

支はありませんで、大丈夫、用は辨じると思ひますが」

馬「然うですな、まア漢書が讀めますと、今日、東洋問題の處置に、さ、さ、差支はありませんでせうね、私なんか、姓名が碌々書けないで困ります、少い時學問して居たらこんな不自由はしませんもの！」と又おろくになる、

馬「兎に角早く参りませうか、こんな時には早いが勝です」と車を飛ばせて先へ行く、遅れじと後より。

(其二) 鬼頭大臣邸應接室の場

書生川村、代議士馬川鹿一、同瓜田鈍作、

川村「唯今の次第で、大臣閣下は未だ宮中からお下りでありませぬから、委細承つて置きまして私から申上げませう」

瓜田「大臣が未だ御歸邸でないとは困りましたな、實は一刻千金を争ふと

いふ大切の場合ですから此儘引返すも心元ない譯だし、さればと云つて  
 茫然と待申してゐる事も出来ません……甚だ御邪魔ですが之は一番、奥  
 様にお目に蒐つてお頼申して置くと致しませうか」  
 馬川、半酔半醒の體にて無上に頸を振りながら「左様々々……それ……それが  
 名案、奇妙奇てれつの策です、流石は瓜田總務長官、善い所へ御氣が附  
 きましたな」  
 瓜田イヤ、馬川書記官長様、私はもう外務省のお役人になつた様な氣持  
 がしますよ」  
 馬川イヤ、馬川書記官長と呼んで下さると私はもう身内がぞく／＼して  
 來ますよ、頭の光るのもこんな時には後光がさしてゐるのかと思はれます、  
 難有うムいます……」とよろ／＼、鼻汁を吸り上げ「書生さん、何卒奥  
 様へ御面會を願ふてゐるとお取次ぎ下さう」  
 川村奥様は外來の御客様にお逢ひの例はありませんから、私から大臣閣  
 下へよろしく申上げませう」

瓜田「そんな事を云はないで……」紙包を密と袂へ入れてやり「これは眞  
 の烟草代、何卒よろしく頼みます」  
 書生莞爾「まあ一寸取次いで見ませう」奥へ入る。  
 瓜田馬川さん、矢張、萬事鼻藥の世の中ですなア」  
 馬川「左様ですとも、鼻藥の魔力は恐ろしいものです、又た随分と高く  
 つきますよ、私の家や倉庫も大概選舉區の風向を直す鼻藥に使ふて了ひ  
 ました……」と又泣聲。  
 瓜田イヤ、お互に御同感ですな」  
 書生出て來り、僕が種々辯舌を振つて殿様の別戀の方々だから一寸御面  
 會下さる様、奥様を口説き落して來ました、只今茲へ御越になります」  
 ○  
 云ふ中、令夫人藤子、廿六七の美人、大丸鬚わざと、愛嬌笑くぼ作つて  
 出て來る、後より一子守雄八九歳の梳白盛、洋服姿、手に玩具の喇叭を  
 持つて蹤いて出る。

「これは奥様でムりますか、始めまして」二人低頭平身、挨拶よろしく。藤子「まア、何卒御掛けなさつて下さいまし、それでは御話が承はれませんから、まア、さア、何卒……」

守雄「お母さん、又羊羹運動が来たのね——」

藤子「これ、知りもせん癖に、黙つてゐるもんで……殿様は未だ宮中から下りてありませんが、何か急な御用があんなさるさうで、女の私には、とても伺つても分りはしますまいが、遠くと仰やるさうですからお目に蒐ります」

瓜田「へイ、誠に恐入ります、實は其……この……其、私も其、何んですが、この馬川君が、其、實は内閣書記官長に御任用あるやう、大臣閣下へ達て願ひしてくれといふ話でムいました」

馬川「何卒よろしく願ひ申す、瓜田君何うも難有う、御恩は忘れません、奥様の御盡力で左様なりますと、國の嫌も喜びますてムいます難有うムいます」といひ、呃り上げる。

守雄「やア、可笑いな、この書記官長は泣つ面の書記官長だ、ヤア、可笑いなア……」

藤子「汝彼方へ行つてお在なさいよ、失禮な事を云ふものではありません、守雄行かないよ、行かなくても善いぢやアないか、僕は大臣の子だから代議士なんかよりは豪いのだわ」

馬川「最早笑顔になり「眞實に坊ちゃんはお豪く遊ばしますわ、お幾歳でムいます？」

守「僕は八歳だ、君は幾歳だい」

馬「ハイ、當年取つて六十四歳に相成ます」

守「まア年老だねえ、お父さんは三十六で大臣におんななすつたのに、君は六十で代議士なのかね、僕のお父さんは豪いねえ」

馬「左様でムいます、誠に豪く遊ばします」

藤子「守雄そんなお喋舌するものではありません……急の御話とは其事でムいますか」

瓜田「ハイ……それからあの……馬川君……イヤ、その……實は其、私も、其、……恐入りますが、其、私も外務の總務長官を切に希望してゐたと仰つて下さいませ、奥様からお頼み下さつたら此度成功しますから何卒よろしくお願ひ致します、私は長野縣撰出で、生絲の産地でゐますから、その方の御用なら何時でも相違しまするてゐます」  
藤子「お話しては見ませうが、随分お申込のお方が多うゐますからホ、ハ、ハ、」

馬川「何分よろしく、私は鳥取縣で牛や馬の名産地でゐます」

守雄「馬が居るのかい、僕に一つ持つて来てくれないかね」

馬川「お安い御用、早速國へ申遣はすてゐませう」

守雄「僕は馬に乘度なくて、仕様がな、木馬に乘るけれども面白くないわ、僕は乗る事は上手だよ、一寸、君、一寸と此處へ坐つて見給へ……」と馬川の手を引いて床の上へ引据える、馬川、守雄の云ふまゝ、四つ這ひの馬になる、「ハイ、どうくくく進めく」踏跨り手に持てる喇叭

を吹くと、馬、坐中を這ひ廻る、

藤子「コレ、マア、そんな失禮な」

守進「めく、ブツブツブツブツ、面白く、もつと早く進めく」

瓜田「ヤアこれは坊ちやまゝ豪うゐますな」

藤子「コレ、そんな失禮してはいけませんよ」

玄關「咳拂、書生出迎へて、」

「奥様、湯島の御前が入らつしやいました」

藤子「オヤ、お父さまが……」皆々周章る、二代議士狐鼠々々と、大泡喰

ふて逃げ歸る。

石澤岩太郎、年配六十前後、嚴かしさうな顔の老人、今日は莞爾々々して入来る、後より同夫人安子、五十恰好、これも一苦勞して来たやうな女性。

藤子「善くこそ入らつしやいました」



岩太郎「今日は目出度な、宮中の御式は未だ済まないから」  
藤子「ハイ、未だ歸つて参りません」

安王「今の連中はありやア何んだね、守雄の遊仲間とも見えなかつたやうだが、此の子が馬乗になつて騒いでたぢやアないか」  
安「あれはね、祖母様、羊羹運動、可笑いね」

岩「ハ、獵官連中か、随分とうるさい事であるうな」

藤「ハイ、もう貴方、朝から引切なし、總務長官が八十八人、知事さんの候補者が三百三十人計り出來てるさうでムいますよ、ホ、ホ、ホ、今の方なんか、我夫へ急用だつて云ひますから私、うるさくて仕様がなけれども、逢つて見ますと矢張獵官なのでムいませう、眞實に呆れて了ひました、まア、これへお掛けなされませ」  
卓を圍んで親子椅子へ倚る、

岩太郎「それでもまア、汝も今日からは大臣の令夫人さん、こんな目出度い事はないよ、矢張私の眼鏡が違はないで良い婿を取り當てたと、今も婆

さんに途々自慢して居る處さ、あの、それ、幼馴染の従弟妹同士とは云へ、小田川の馬鹿男爵なんか婿にしてた日には、方々の高利貸に責め立てられて私等に迄容易ならぬ迷惑がかかる、世間の物笑にはなる、今頃はもうさんく、な目に逢ふ處だつたが、華族といふ肩書へ惚込んでその方へ達てと云張つてる婆さんを無理遣押へ附けて、一文なしの貧乏世帯からとうく之迄に漕ぎ附けた石澤家へは、矢張似合ふた貧乏辯護士の鬼頭剛を、私が眼鏡で婿にした計りて、今日、こんな嬉しい目を見る事になつたのだ。何んの、小田川の男爵なんかは、三代も前の祖先が勤王の功勞があつた、その尻馬に乗つたんだもの、剛が此の勢では、今に伯爵侯爵位には直ぐ出世しますとも、眞實に器量のある男だ、これからは一層大切にして例の我儘なんか決して出してはなりませんぞ」

藤子「ハイ、心得えて居ります、随分と大切に致します」  
安王「私だつて何にも、小田川の明を婿にすると云張つた譯ぢやないが、従弟同士の義理ある中で、二人共小い中から仲が善かつたので、それを

無理に引離すのが可哀さうだと思つたもんだから……」

藤子お母さん、もうそんな昔の事を云はなくても善ござんすよ」

安子否や、眞實の事たもの、……お母さんは眞實に、それが可哀さうだと思つたから汝の肩を持つて上げたんだもの……それでもまア、夫婦になつて見ると自づと情合も出て来るもので、剛との仲も思つたよりは睦ましく、この孫が出来てからは私はもう安心して喜んでゐたのだが、今度又こんな目出度い事があつて見ると、まア、善かつたと今更胸を撫つてゐるのですよ、そりやアあの剛にもなか／＼腕はありますが、一つは何萬といふ財産を我家から借氣もなく蒔き散らしてやつたから其御蔭も大きにありますが、矢張これも親の御恩ですよ」

藤子そりやもう左様でムいますとも、我夫に幾ら腕がありましてもお金が無ければ人望も集りませず、勢力も出来な訳でムいますから、我夫もお父さんやお母さんの事を疎略に思つてゐる處ぢやアムいません」

守雄ね、祖父さん祖母さん、僕のお父さんは司法大臣だから日本の人

を皆監獄に打込まうと思へば打込む事が出来るのだつて、川村が然う云つてたが、眞實なの？」

當ツム、司法大臣だから法律の方の總大將だな、然う無間な事も出来まいが、汝だつてあまり梳白が過ぎるとお父さんが監獄に入れるかも知れないよ、氣を附けないといけませんハ、ハ、ハ」

安子貴方、まアそんな事を仰つて、監獄なんかへ守雄を誰が遣りますものか、守雄は司法大臣のお子さんだもの、お行儀が良くて、學校では勉強して、今に、お父さんよりか豪くならなくてははいけませんよ」

守ア、僕は豪くなるとも、僕は内閣總理大臣になるんだ、お父さんよりか豪くなるよ」

藤子この子はあまり梳白ですからお父さんは陸軍大將にしてやろうと仰やつてムいます」

守僕は陸軍大將と、それから總理大臣になるんだ」

当ハ、ハ、此奴はなか／＼豪い事を云ふわい、守雄がそんなになるまで

私も生きて居りたいものだ」

安子「眞實にもう何年生きてゐたら、此子がそんなに大人になりますかね」

藤子「我夫の歳になるまでもう二十四五年でゐます、私がもう五十幾つ、大分お婆さんになりますのねえホ、ホ、」

守雄「それぢやお母さんがお婆さんになつたら、僕があつた陸軍大將と總理大臣になるのかい、お母さん早くお婆さんになつて了ふが善いわ」

岩太郎「ハ、ハ、この子は何うも我儘許云ふの」

安子「ホ、ホ、眞實に、まだ罪はありませんねえ」

守雄「罪なんかないよ、司法大臣の子だから罪なんかありませんよ」

藤子「だつ子で仕様がありません……ですがね、お父さま、お母さま、我夫がこんなになりましたのが嬉しいにつけ、私は又、反對黨の壯士に附属はれたりなかなさつて、星さん見た様な悲しい事が起つて呉れねば善いがと思つたりね、それから又、私の様な智慧も學問も足りないものは何時か見捨られはしないのか知らと、ついそんな心細い氣がしてな

りません……昨夜なんか何うしたのでせう、我夫が黒塗の馬車へ乗つて通つてらつしやる處へ、私が乞食になつて、後から泣きながら追駈ける夢なんか見たのでゐます、我夫に揺起されて漸と安堵しましたの」

岩「夢は逆夢だつて云ふからそんな氣遣ひが要るもんか、馬鹿々々しい、それだから女は駄目だハ、ハ、」

藤子「眞實にねえ、夢なんか一々氣にしてゐては大臣の令夫人さんなんかになつては居られませんのねえ、……つい話に實が入つて了つてこんな處でね、さアお父さんお母さん、何卒奥へお通りなさつて下さいまし」

守「奥にはカステラがあるよ、祖父さん祖母さん、早くお出て下さいよ」

と眞先に駆入る、續いて三人。

青生川村「イヤ、何うも坊ちゃんの前羊羹運動者が蠅の腐る様にうるさく遣つて来るには困つて了ふなア、それも今の奴等のやうに、多少賄賂を置いて行くのなら取次の勞敢て辭する處にあらずだが、大きな面をしや

がつて、貴様では分らんから後刻大臣に直々面談するなんて抜かす奴は  
實に癪だねえ、今の馬先生、幾何置いて行つた……オヤ、圓助かと思ひの  
外、五十錢とは情ない、自分が馬だと思つて人を鹿にしてるやがるんだ  
なア……何んだ又玄關へ誰か遣つて來やがつた、うるさい、もう玄關拂  
としてやろ……」

女の聲「お頼み申します」

番生「何御用……はア、鬼頭大臣の邸は此方ですが大臣閣下は未だ御歸邸  
でありません、貴方は何處から……」

云ふ中、女二人上る、一人は廿六七、色白く頬こけ、眼に曇を帯びて  
寝れたれど、容貌美しくしき女、即ち鬼頭の舊情婦、鏡綾江、一人は五十  
過の老女、綾江の叔母の鹿野。

番生「貴方方も何か官吏にでもなり度いといふお願ですか……それとも代  
議士の奥さんですか」

鹿野「イヤ、私共はそんな者ではムいませぬ、今度高知縣から遙々尋ねて

参りましたもので、剛さんに直々お目に蒐つたら分る話でムいます、何  
卒御取次なさつて下さいまし」

番生「イヤ、大臣閣下は未だ御歸邸になつて居られませんが、高知縣から  
御上京なさつたと云ふと、何か御縁故のある方てムいますか」

鹿野「イヤ、縁故處ではムいませぬ、此の娘が剛さんの奥さんになる人  
てムいます、お留守ならお歸りまで茲で待たせて戴きます、のう綾江さ  
ん、暫らく待つて居ませう」

綾江「左様でムいます、御目に蒐れるまでお待申して居りませう」  
番大變な奴が舞ひ込んだぞ、氣狂か知ら……貴方方は一體何といふ方  
て」と屹度なる

鹿野「イヤ、私は鹿野、これは鏡綾江と申しまして、叔母と姪との間柄でム  
います、剛さんとはいろ／＼深い譯のある仲で、それで此回田舎からわ  
ざ／＼剛さんを便つて出て参りましたのでムいます」

番生「兎に角今日は留守ですから、又出直してお出でなさい」

鷹「イヤ、お歸りなさるまでお待申して居りますから何卒お構ひ下さりませぬ」

曹「取込中だからいけません、お歸んなさい」

鷹「イヤ、待つて居ります」

曹「お歸んなさいといふに、失敬な」腕捲りして立かゝる。

綾「あの、御目に蒐りましたら話は分る事でムいますから」

曹「兎に角、今日はお歸り下さいといふに……まだ歸らないですか」段々大聲になる。

綾「剛さんに逢ふまでは歸りません」

鷹「何時までも待つてゐます」

曹「剛情な、失敬な奴だ」と突出さうとする、ドクバタ／＼する。

岩太郎「何事だ、騒々しい」と立出る

曹「イヤ、此奴等が氣狂ひめいた事を申しまして、大臣閣下に御目に蒐

るまで、ちつとして待つてると申しますから、追返さうと致しましたので」

岩「ハア……一體、何うした御人かな」

鷹「ハイ、あの貴方は何方様かは存じませんが、この娘は實は剛さんとは深い譯のある仲でムいます、今回私と一緒に遙々、高知縣から此方へ尋ねて上つたのでムいます、剛さんに何卒逢はせて下さいまし」

岩「ハア……剛と譯のある……フ、ン……一體、まア何うした譯ですか」と腰を下ろす、二人も椅子へ倚直る。

鷹「イヤ、耻を云はねば理が知れぬと申しますが、まア聞いて下さいませ、實はこの娘は綾江と申しまして私とは叔母、姪同士でムいます、まだ十五六の娘盛の頃、剛さんが高知縣で小學校の教師をしてゐました時分に、偶とした事から互に心安くなり、親達も承知の上で末は夫婦になるやうな堅い約束致しましたのですか、剛さんが何年までも田舎で教師でもあるまいから、一番東京へ出て法律の修業が仕て見度といふ御望なので、この娘の家に多少の財産もありましたし、それでは學資を買がう

といふ事になつて剛さんは東京へ出て参りました、それが今から十二三年も前の事、其中に國元では不幸續きでこの娘の両親共亡くなつて了ひましたが、それでも折角の修業を中途で止めさせるやうな事があつては心外だと、この娘が一了見て、田地まで賣飛ばしまして五六年の間仕送を續けましたが、其後東京の剛さんの處からはばつたり音信が無くなつて了ひ人橋かけて尋ねて貰ふても皆目行衛が知れませんでしたので、何うしてゐるのやらと、親類中の者も心配して、この娘はもう日々毎日、泣くやら辭ぐやら、氣が狂はん許りになりました、それはく可哀さうな事でもいりました……」

岩太郎「ハ、ア……その頃から鬼頭剛と云つたのですな」  
 奥左様でムいます、それが貴方、此頃政治家で名高い人になつてるといふ噂でムいますから、何うしても、姪を連れて東京へ出て添送さねば、亡姉へ對し私の義理も濟みませず、この娘も亦剛さんの事許云詰めて、何處から縁談を申込まれてもすげなく刎ね附けて了ひます、十何年の間

一心に思ひ込んでた男の事でもいいますから、何うしても夫婦にならねば置かないと云つて居りますし、私も又叔母甲斐に、何うしても然うさせてやらねばならないのでムいます、剛さんが見かけに寄らぬ薄情で、恩を恩とも思はず、今頃は此娘の事なんか忘れてるかも知れませんが、人間の皮を被つてるなら、まさか女房にせぬとは云ひ兼ねるでムいませう」  
 岩「フーン……そんな事があつたのですか……ぢやア、反對黨の悪口ばかりではなかつたのですな」

巖剛さんはあの、眞實に奥さんが出來てるのでムいますか」  
 岩「イヤ、もう子まであるのです……それは實にも氣の毒の次第ですが今更何うも取返が附かない事になりましたな」

眞實の奥さんだよ」  
 巖剛さんはそんなに薄情な方でしたかねえ……私は何うもまだ、眞實とは思へませんよ」

岩イヤ、剛君が敢て薄情といふてはないですが、兎に角、あんな豪い人物になつて、今日では一國の大員といふ高い地位に經上つた人ですから昔の考とは又考も違つて居ませう、然ういふ氣の毒な話を聞いて見れば、私も黙つて打捨つて置く譯には行きませんから、何とか貴方方の身の立つやう、又剛君の顔も潰れぬやうな取計をして見ませう、兎に角今日は一應引取つては下さいませんか」

鷹叔母さん、折角御信切に云て下さるのだから、貴方あんまり一刻ですわ、……あの、私と剛さんとは、まだ公然つて夫婦の杯こそ致しませんが、夫婦も同前の仲でいますから、何んな事が在ても何卒元々通りになられますやう、お計らひ下さつたら此の御恩は死んでも忘れは致しません」

岩イヤ、その……元々通りと云つて、兎に角一方には妻もあり子もある事ですから、今更それを何う凭うするといふ事は出来難いが、他に何か、貴方方の身の立つやうな方法を考へて上げます」

鷹叔母、子がありません、女房がありましてもそれは剛さんが勝手に拵らへたので、眞實の女房は世界にこの娘の外にはありませんから何卒その女房になつて居る婦人へよく説得して、實家へ返へすやうな事にして下さいませ、お願ひします」

岩イヤ、夫婦にさへなられますれば何んな事になつても善ムいますからよろしくお願ひします」

岩イヤ、君方もあまり分らずやだ、今日、一國の大員になつた剛さんと小學校の教師をしてた時の剛さんとは全く別人と云つても善いのだから、そんな昔の事を何時迄も云つてないでそれよりか、手切金とか何とかいふ話を私が附けて上げやうから、まアその心算で居るが善い」

鷹叔母、手切金ですつて……私はそんな者を貴ひに態々高知縣から指し

て参りは致しません、そんな淋しい心を持つちやア居ませんよ」  
 奥貴方は一體何んですか、人を馬鹿にしてるつて大概にしたが善えッ」  
 岩イヤ、決して君方を馬鹿にした覺はない、私は剛が奥の實父ぢや、正當の手續を踏んで剛に妻はせた私の娘に何處から一つ、批難を打たれる所はないぞよ……そりや、この娘さんが剛に以前何ういふ關係があつたか知らないが、若い中には随分間違もあるものぢや、それを種に、今日、彼が大臣になつたからつて、無理難題云ひかけて來るといふのは、ゆすり騙りも同然だ、イヤ、貴様等は太ゆすりだ、此方から優しう出りや圖に乗つて、勝手千萬な事を云ふ、當り前なら門前の巡査に引渡す處だが、今日は格別の慈悲で大目に見逃してやるからさア、早く歸つて了へ、歸つて了ふが善い、川村、追ひ歸せ」  
 川村「さア、歸れ〜ッ」  
 鹿野何時、私がゆすりに來た……否や、歸らぬ……ゆすりに來た覺えはないぞ、歸らぬ、歸らぬ……自分の娘を剛の嫁にしてるもんだから、無

茶苦茶な事許り云ふて、嚇して人を追返さうとしてもそんな手に乗るやうな私ぢやないよ、剛さんに直々逢つて話したら分る事だ」  
 岩「まだ剛情を張つてるのか」  
 鶴「自分の娘が可愛けりや、人の娘の身になつても見て下さい、親譲りの田地も畠も皆あの人の學資に仕送つて上げて、娘盛も何時の間にか過して了ひ、この歳になるまで、今日は音信があるか、明日は何か云つて來るか、待つて〜待ち焦がれてゐたんだもの、それを剛さんは何とも思はないで、女房を持つて、子まであるなんて、あんまりだ、あんまりな仕打だ……」と泣入る  
 奥「オ、尤だ、……綾江、汝が口惜しがるのは尤だ……眞實に剛め、憎い奴だのう……あんな生白い面をして、何時も優しさに口を利いてた奴めがそんな狐野郎であるとは、知らなんだ、知らなんだ、何うしてやつたら汝れ、腹が愈やうか」  
 鶴「ねえ叔母さん、あのまア信切にして呉れてた方が、そんな人を欺した



りなんかなさろうとは、何んだか私はまだ嘘のやうてムいますよ……、長い間、便をして下さらんのも、自分が學資を使つて置いて立身が出来ないから、それを氣の毒がつて自分で身を隠して居なさるのだからかと、そんな事許思つて氣休めにしてたんだもの……眞實に剛さんは何うなされたのでせうねえ」

鴻矢張男狐めに違ひないよ、自分の都合で他人を下駄に穿いて要らなくなつたらそこへ放抛して置く、そんな事で一躰、濟むものと思つてるのか、汝さんの娘も今に、金が無くなつたら路傍へ打捨つて了はれやうぞ、要心さつしやい」

岩何んだ失禮な事を云ふな、大きにも世話だ、歸れ、歸つて了へ、歸らんと巡査へ引渡すぞ」

巖こんな人と議論は無益ぢや、出直して又來ませう、さア綾江、又後程やつて來ませうか」  
綾左様ですれえ、是非一度、直ぐに御目に蒐つてね……」あの、これは

高知がらむざ／＼持つて參りました鱧節でムいますが、彼方に居なさる時分剛さんが大好物で、三度の御飯に何時も缺かさず花鱧にしてかけて召上つたのでムいますから、何卒これを少量ではありますすが差上げて下さいませ」

岩はア、届けて上げませう」  
巖そんな事をするに及ぶもんかい……汝が折角、荷になる奴を持つて來て、自分で花鱧を搔いて上げるなんて、何時迄も子供らしい事を云つて喜んで來たのに、男といふものは薄情なものだなア」

綾江俯向いて、立つてゐる。  
喇叭の音、「やかましい氣狂婆め、斯てやるぞ」と奥の方から、玩具の劍を打振り、守雄は荒々しく駆け出づる、後より周章しく藤子夫人「コレ、暴れるではありませんよ……お父さん、この方等は一躰何うした人なんですれ」と氣色を變へてゐる。  
岩さア、後から分る」

守斬つてやる」と、母の手を逃れて、鹿野に切り蒐る。  
 鹿「アレマア、危い」、剣を握つて思入「此の子だな」  
 綾江は藤子に目をつける「貴方があの剛さんの……」と睨んで立つ。  
 藤「ハイ、私が剛の妻ですよ、汝さんは何を云つて来たのですよ」  
 守斬つてやる……離せ、離せ、離さんかい」

幕 序

玄關に聲あり「お歸り——」  
 鬼頭剛、美髯、白哲、金光燦爛たる大禮服にて入り来る  
 藤子「お歸り遊ばせ」  
 岩太郎「ヤア、お歸りか」  
 安野も立出て「お歸りですか」  
 剛はア、只今……守雄何してゐる。  
 鹿野は尻と見て、呆れて立つてゐる。

司 法 大 臣

綾江つか／＼と歩み寄り「剛さん……剛さんだ、剛さんだ、まア……  
 お懐かしうムいます……」  
 剛「エ……」  
 奥剛さんか、貴方の女房の綾江を連れて来ましたよ、あんまり久振だから見違えて了ひました」  
 剛「エ……」  
 綾江猶も泣籠ろうとする、振拂つて「何んだ、知りもしない奴だ、氣狂ひだろ、川村、追出してさへ、藤さん、守雄、お父さんもお母さんも、さアお出てなさい」と一同を促して奥へ入らんとする、鹿野、鯉節の包を持つて、隙さず追ひ籠がり「剛さん、これは綾江がわざ／＼土佐から持つて参つたのですよ」  
 剛知るもんか」と手荒く叩落して駈込む。  
 ぢつと見送つて綾江、口惜しき思入「叔母さん、……矢張私は欺されましたのかねえ……」

「奥オ、……口惜しいのう」  
奥「口惜しうムいます」と襦袢の袖を喰裂く。  
川村「ア出て了へく、叩き出して了ふぞ」

(幕)

第二一幕

(其一)鬼頭邸園遊會の場

音楽隊の奏樂、各所に天幕、緑樹匂ひ國旗ひらめく、此處には閑雅なる亭の設けあり。

上手より内閣總理大臣大垣安民、内務大臣小崎文雄、大藏大臣益田彰、鬼頭司法大臣に導かれて逍遙しながら出来る。

大垣イヤ愉快々々、鬼頭君の盡力で、何うも近來の愉快を盡したぢや、此上は互に協力一致して國民黨内閣の萬歳を計んければならんなア」  
益田左様です、一番、國民黨内閣の手腕を天下に示してやらんければなりません、在野の政客は唯口先許の經綸策で、俄え犬が人に吠へ附くや

うなものだなんて、從來我輩を輕侮してた連中に鼻を明けさせてやらんければなりませんな」

小崎イヤ、此の内閣もあまり永持もしさうもないですよ」

益田「申談にもそんな怪しからん事を云ひ給ふな」

小崎「縣知事の自稱候補者が三百大名の數よりも餘計に出るやうな政黨では、何んだかあまり頼もしくもありませんからな」

鬼頭イヤ、そんなに豪傑が澤山あれば大に頼もしい譯ぢやないか、自信は即英雄を造るのだから、我黨にそんな自信ある人が多いのは結局我黨の多士濟々たるを見るべき所いかな、けれども同じ自信なら縣知事なんてそんな小ぼけな望よりも、寧ろ三百の大臣候補者が出て来てくれたいと思ふね」

小崎「左様さね、大臣の候補者を以て自ら任ずる様になつたら即ち自信……知事なんか望む手合は兎角自惚と梅毒ツ氣て鼻持のならぬ連中だて」  
鬼頭イヤ、その知事先生、所謂官海の大地震には毎々びくつく奴だから

じしん(自信)なんか眞平御免と來てるのかも知れないや  
一回ハ、ハ、ハ、ハ、

下手より警視總監馬淵玄、檢事正小倉信一

馬淵何うも廣い庭ですな、樹木の古りたあんばいから、石に苔の附いた工合なんか、何うもさすが廣い東京にも、あまり多く見受られませんか  
小倉はア、左様でせうな、随分贅澤を盡してゐるやうですな

馬萬事、金にあかしてやるのですから敵ひませんね、鬼頭さんが大臣になつて居られる中は此内閣も萬歳でせう  
小倉何も彼も金鍔にせられた日には弱りますな  
馬淵、小倉の腕を引いて、つかくと進み寄り

「ヤア、大臣閣下、お揃ひで此所に居らつしやいましたか、今日は何うも盛會で結構でムいます」  
鬼頭ア、馬淵さんか……未だ御紹介しなかつたがこれが馬淵警視總監……

……此御方が大垣總理大臣……小崎内務大臣……益田大藏大臣です」  
馬淵はア、私の方では善く存じて居ります、折角の御勸告に従ひ私は内閣の更迭如何に關せず引續いて此職に居ります以上は、随分忠實に義務を盡さうと存じますから、何分よろしく

三大臣「よろしく……」

馬淵に司法大臣閣下、御存じかも知れませんが、これが檢事正小倉信一君、改めて御紹介致します」

鬼頭何うも多人數取込中で失禮したが何卒御ゆつくりなさつて下さい」  
小倉「馬淵はア難有う」

鬼頭ア、皆さん、此所へ腰を掛けて些と休息しませうか、辨慶の立往生も閉口ですから……イヤ我黨内閣も立往生では困るですから、倒るゝ迄遣附けませうよ、三鞭を一番、これも倒るゝ迄遣附けませうかハ、ハ、ハ、

鬼頭、遙か彼方の天幕へ向つて呼ぶ、藝妓來り三鞭酒を持ち運ぶ、一

同玻璃杯へ受ける。

鬼頭「それでは一番、國民黨内閣の萬歳を三唱させようか、先づ天皇、皇后兩陛下の萬歳を祝し奉つて、次に我黨内閣萬歳……總理大臣の御發聲で願ひませうか」

各自杯を合せて萬歳を三唱す。

馬淵「それでは、今度は鬼頭司法大臣の萬歳を唱へ度いですね」

各直「それはよろしい……」

「鬼頭司法大臣萬歳……」

鬼頭「難有う……イヤ、斯く萬歳を三唱して祝した次第ですから何うしても此内閣の萬歳を計らんければならんです、之迄も内閣瓦解の致命症は多く腹中の病氣から起るので内輪の折合の悪い胃病が原因だとか、財政の呼吸の續かない肺病が源だとか、或は血氣に逸り過ぎて心臓破裂なんか引起して倒るゝ例が多い様です、何んの、外から受けた負傷なら假令重症でも手足一本失ふ覺悟なら多く生命には別條ない、殊に今回の内閣

は過半数を占めた國民黨を踏臺にして立つてゐる次第だから、貴族院は兎に角、衆議院の方から、先づ、攻撃の火の手の上る氣遣はない様だが、黨内の不平分子、所謂鹿を撃ねて手を空しうしてゐる獵師連が、やけ糞紛れに百姓一揆を企て、折角結んだ垣も塙も壊して退けやうとするかも知れないで、夫が聊か心掛りですがお互に注意して鎮壓策を取らんければなりません、次には屬僚連の頭を叩へ付けて政務の滞り無き様にどいゝ運んで行くのが肝要だろと思ひますが、馬淵總監にも是非一番盡力して貰ひ度いものだね」

馬「イヤ、そこらは萬事心得て得ります、議員連中の弱點に附込む策は私も多少経験して居ますから、いざとなれば手腕を揮つて御目に蒐けます、其節は小倉檢事正の御力を借る必要があるかも知れません」

鬼頭「小倉君、萬事何卒よろしく頼みますよ」

益田「我黨内閣が失敗しては政黨内閣といふ理想は長へに行はれなくなるかも知れん大事の場合だから、その節は諸君是非御依頼する」

小賢司法權は獨立だから敢て干渉を受んと云給へ、小倉君は迷惑してゐる様だよアハハハ、」

鬼頭司法權獨立と云ふのは、あれは紙へ書いた表看板、結局裏から廻れといふ謎に過ぎないさ、少し常識があれば分る話ぢやアないか、國家あつての法律で、法律あつての國家ではないからな、要するに法律にしる又政治にしる、頭立つて運用して行く人の手心一つ、恰當操人形の糸の様なもの、下で眞面目腐つて跳つてる奴は氣の無い馬鹿者だが、上から笑つて上手に跳らせてる奴が察いのぢや、一國の國務大臣が國家の利益の爲めに政治を遣つて行く必要上、司法官の力を藉りる事がありとすれば司法官は寧ろ喜んで然諾を與ふべきだと思ふ、それが即ち、文字の上の獨立を捨て、精神上の獨立を發揮し得る所以さね」

小賢こんな司法大臣が出て來ては司法官連中も大恐慌だ、イヤ、其下で跳る奴が何時滞の中へ陥落るか、小石に踏かされるか知れたもんぢやアない、大に警戒を要する次第だね」

鬼頭互に大臣にでもなつて國家の重任を双肩に擔ふてゐる以上は、それ位の覺悟がなくてはならないさ、結局我々は自由自在に我が意志通り實行すればそれが自然と憲法ともなり、法律ともなつて行くのだ、鶏なんか伏籠に入れて、庭の隅に小米でも宛伺つて置かなけりや何日何時隣の畑を荒して法律の網に觸れるかも知れないが、然となつては、それ、あの、大空を自由自在に駆け廻つて太陽を攫んで來たつてまさか窃盜罪にも問はれまいぢやアないか、大に遣るべしさ、日本を世界の槍舞臺へせり上げて、目醒しい働きをやるのは我黨内閣の責任だぞ」

大垣總理「イヤ、相不變、君の元氣には敬服するよ、鬼頭君は我黨内閣の大黒柱ぢや、馬淵君も小倉君もよろしく頼みますぞ」

馬委細承知しました、心得て居ります」

小倉檢事正唯默禮、小賢大黒柱は善いが、此の柱は兎角活動し過るので、我黨内閣の地震の源因になる恐があるよ、ハハハ、」

鬼頭ハ、僕が大黒柱で總理大臣が床柱か  
益田小崎さんが棟木の様なものだ」

鬼頭他の連中は雪隠柱かね」

犬馬コレ、あまり君も皮肉が過ぎるよ」

鬼頭失敬々々、御主人公一杯喰べ過して、大黒柱が徐々舞を舞ひ始めた

さうな……あ、東郷海軍大臣が藝妓連と大浮かれに浮かれて此方へ見

えまです、しきりに此方へ向いて手招きしてゐます、何うです、それで

は彼方へ廻るとしませうか」

其中、東郷海軍大臣、勳章星の如く胸間に燦めかせて踰躑として駆け

来る、藝妓連後に附添ふ

東郷皆、何しちよる、此方へ来たが可か、人間生きてる中に飲める丈飲

まんちゆうと、死んでからは極樂へ行ても酒は無か、藝者は居らん、皆

来て愉快盡すが善か、來給へ、愉快ぢや、躍りながら皆々を促

して連れて入る

男爵小田川明二十七八歳、洋行歸の貴公子、肺を病みて色稍蒼白の體、  
大臣夫人藤子の手を引き入り来る、藤子今日は洋装、  
藤子何んですよ、明さん、人をこんな處まで引張つて来て、眞實に仕様  
がないぢやありませんか、酒にお酔ひなすつたからつてあんまり失禮で  
すよ」

明「まあさ、善いぢやありませんか、然う怒らなくても」

藤子「もうお離しなさいよ、手が痛くなりましますもの」漸く振切る。

明「司法大臣令夫人なんか云はれる身分になつたからつて、俄かに、藤子

さん、お氣が強くなりましたのねえ」

藤子「知りませんよ、入らぬお世話ぢやありませんか、貴君の御用つて、

それ限なの」

明「それ限なのつて……藤子さんあんまり、薄情ぢやありませんか、貴方

はそんな事を云はれた義理ですか」

藤子「酒に酔つてらつしやるからと思つて我慢してりや貴方は好きな事を仰るのねえ、もう知りませんよ」と行かうとするを引留めて  
「まあ、お待ち、待つて下さい、藤子さん……私は酔つてはゐませんですよ」

藤子「エ、酔つてない人が……真面目であんな事を云つてらつしたのですか」

明「ハイ……真面目です……真面目ですよ藤子さん……貴方はもうすつかり昔の藤子さんとは違つて来ましたのねえ、私は矢張、元の通の明です……今の立派な婿さんが貴方の處へ来る事に話が愈定つた時、二人が春の夕暮にもう花も散つた彼の上野の山内を泣く泣くさまよふて行いた事をもうすつかり忘れて了つたのですか、……まさか女郎や遊治郎の道るやうな真似も出来ない譯だし、之も世間の義理、伯父へ對しても濟まないから、夫ではもう私も諦めて了ひませう、貴方も之限諦らめて下さい、その代私は一生、貴方を妻と思つてゐますと、私が云つた時、貴方は何

と云ひました、私も假令夫は持つても心では厭、貴方へ對して操を立てゝゐますと、ハイ、私はよく覚えてゐますよ、貴方はもう八年前の事をすつかり忘れて了ひましたな……貴方は嘔吐です、輕薄な女です……」  
藤子「……そんな……そんな昔の事を云ひ出して、今更、貴方は私を苦めやうとなさるのですか」

明「昔の事……そんな貴方は輕薄な、女郎にも劣つた女でしたか、眞實に戀をした人には十年も一日ですよ、……あれから直ぐ私は洋航して、一昨年歸つて来て見ると、貴方の様子が何うやら變つてゐるのに氣は附いてゐましたが、親類中でも兎角疎遠勝になつてゐるのだから一坐して貴方の胸を問訊すといふ機會もなく、爾々と日を送つて来ましたが、今日の園遊會へ招かれたを幸面を拭うて遣つて来て、邊に人なき機を伺ひ泉水の傍の貴方の掛茶屋へ立寄ると貴方があんまり出て行けがしの仕打をなさるからつい胸が込み上げて、酔に託せこゝ迄引張つて来たのです」  
藤子「私は司法大臣の妻で今日の園遊會の主人ですよ、他の客人へ對して



の手前もありません、今日はそんな話はお断りなさい下さう」  
明はア、貴君が司法大臣の妻といふ事は今更承はらなくても分つてゐます、……唯、貴方の心の中が聞き度いのです」

藤子若い中の事は若い中の事です、今は守雄といふ子もある中、夫に對して二心は持ちませんよ」

明何……ウム、それでは愈、あの剛にすつかり籠絡されて了つたのですな……女といふものは高嶺か何んぞのやうに何處へても附着たがるものですなア」

藤子親の許した夫婦中ですもの、何とでも仰やいまし」

明其親を怨めしいと云つたのも、矢張その口でしたよ、ア、私は馬鹿でした、方々から持込んで来る縁談は皆断つて了ひ、亞米利加に居る中も強いて學問に身を入れるといふてはなし、貴方の事許思詰めて、胸苦しくて堪らなくなると麥酒を煽る、花牌を引く、詰らん真似許遣つて二十年の生涯を烟にして退けました、……この頃は體を痛めて折々は血を

吐きます、何うせ永くは持ちますまいが、これから先も矢張こんな事てぶら／＼送つて行きます、ハイ、明は一生願て暮して見せます、藤子さん、私の胸の鏡には、昔の儘の、清淨潔白な藤子さんが善く映つてゐますよ、もう貴方には用はない、鬼頭司法大臣の夫人さんには用がない、私の心に活きてる藤子さんが、私の一生の妻ですよ……」

藤子明さん……明さん、貴方はそんなに迄、私の事を思つて、下さるのですか、其御志は忘れはしません、難有うはムいすが……そんなに私の事を思ふて下さるのなら、何卒御體を大切に私に安心させる爲め早く奥さんをお迎へなさつて、一廉の官職にでもお就きなさい下さいますせんが、貴方程の學問もあり、才智もある御方なら立派な官職に就かれますもの、何んなら私、我夫へ然う申しまして……」

明イヤ、その御心配は御無用です、憚りながら明はまだ鬼頭なんかの靴の紐を解くまでに墮落はしませんよ……藤子さん、貴方の夫は眞實に働かざる者です、妻い腕があります、良い夫を専主に持つた者は苦勞が絶えな

いとふ事だが、折角。まア御用心なさるが善いです……」  
藤子「難有う……全く私には過ぎた夫かも知れませんが……エ、何うな  
となりませうよ」

守雄「お母さん、何うしたのだね」  
お母さん「何處へ行つたの？」と駈け来る。  
女中「奥さま、汁粉屋大繁盛でムリです。奥さま……」

守雄「お母さん、此處に居たのね、何してるの……小田川の叔父さん、何  
してるの」

藤子「オ、守雄さん、何うしたのだね」

守雄「總理大臣の禿頭やねえ、陸軍大臣の痘痕のこんなにある老爺さんな  
んか、大勢藝者を連れて来て、汁粉呉れッつて大騒してるの、お母さん  
行きませう、小田川の叔父さん、君も汁粉を食へ給へな」  
男「私は大忌ひだ」

守雄「お母さんがお拵らへなかつたのだから旨いよ」

男「私はそんな餡の腐つた汁粉なんか食べると胸が悪くなるの」

守雄「腐つてるもんか、君は酒ばかり飲んでぶらぶら遊んでゐるのだつて

ねえ、僕のお父さんは大臣になつたのだよ、豪いだろう」

藤子「……さア参りませうよ、明さん失禮します」

男「勝手になさる」

守雄「勝手にするよ、ピ、ピ、ピ……」

男「ア、色の懸のと騒ぐのは矢張若い血汐が一時の熱病に罹るのかなア、  
藤子さんが己よりは餘程伶俐なといふもんだらう、己は白晝日中も夢を  
見て浮々今日迄暮して来たのか、もう大概目の醒め時、何處からか妻を  
も迎へて、家庭の甘い蜜を包んで、浮世の苦味を忘れて了はうか、……  
否、今更そんな真面目腐つた見も氣が利かない、病氣も何うやら肺病  
らしいが、これでは己の壽命ももう知れてゐる、何うせ斯う踏み違へて

迷ひ入つた深山路だ、エ、まゝよ、行く處まで行くが善い、こんな道筋を教へてくれた藤子さんには、乾度御禮をせんけりや男の一分が立たないまゝ」思入

○ 下手より鏡鏡江、立派に着飾り、邊に氣を配りつゝ立出づる。

陸江混雜に取紛れて漸く忍び込はしたものの、廣い廣い庭で何處に剛さんがお居なさるやら、探し廻つても皆くれ解らず、女中か何かと間違へられて度々申談をしかけられる、彼是する中日も大方暮れかゝつては來るし、エ、もう眞實に氣の揉める事ではある、何卒早く剛さんに逢ひ度いものぢやが……と獨語ちつゝ、偶と、思案に沈んでゐる明を見て、傍の樹蔭へ身を寄せる。

○ 上手より鬼頭司法大臣、聊か酔へる風體、うるさく附纏ふ藝妓を叱りながら、「彼方へ行つとれ、エ、彼方へ行けといふに、善いか、誰にも云

ふな、私が此方へ來たと云ふ事誰にも云つてはならんぞ、善いか、早く行け、行け……や、何うも陸海軍聯合して酒呑童子と山田の大蛇、一緒にになつて攻め蒐けて來ては、いかな鬼頭剛も大弱に弱込んで了ふのぢや、先づこの邊へ御蒙座遊ばしたら一時の魔除にはなるといふもの……ヤア……小田川君か、失敬……時に君は大さう眞面目で居るが、今日は我輩が大臣就任の祝賀會だ、幸に一杯過してくれ給へ、君も親類の好誼だ、藤子とは従弟妹同士、折々は又遊びに來てくれ給へ、然う外々しくするには當らないぢやアないか」

○ 男ハ、難有う……と言葉少な、

團時に、君は當時無職で遊んで居るといふが如何に華族でも、世襲財産が出來てゐても、遊んで食つてゐては人間の義務に反する、天地間に湧いた者は一匹の蛆虫にてもちやんと授かつた職務があるものだ、何うだ、一番、吾輩の秘書官になつて見る氣はないか」

○ 男難有うはふいすが……仰の如く私のやうな、その蛆虫にも劣つた者

が、貴方の秘書官なんかになれやう筈がありません、失敬します」と、ふいと入る。

後見送つて「ハ、ハ、ハ、怒つたな、……イヤ、兎角、臆病者の癖として恐い者に出遇つたら一寸と怒つた風をして見せるものだ、小癪な、猫の子めが脊中立て、鼻嵐を吹いて向つて来るから平氣な犬もつい吠えたり、噛附たりしなけりやならなくなるのさ、ア、こんな馬鹿華族許り殖えて来て、皇室の藩屏へ樂書をして汚しよる、何んでも世間は素裸で實力の競争にせんければならん、回向院の相撲が一番公平かなア」云ふ中、綾江、窺ひ寄る。

綾江 剛さん、剛さん、綾江でいます、見忘れたとは云はしませんよ」

剛 エッ……、何う……、何うして来たんだ」

綾江 忘れたとは云はしませんよ、剛さん……「段々涙聲になる。

剛 何うして此處へ……」

綾江 綾江でいます、鏡の綾でいますよ、剛さん、見忘れたとは云はし

「ませんよ」

剛 ヲレ放せ、……邸内だ、そんな高い聲をしなくても話は分る、逃げも隠れもしないから放せ、エ、放せ、……一體何うして此處へ忍び込んだのだ」綾江 イ……あの、叔母さんと一緒に裏門口から混雑に紛れて入ろうとしました、叔母は巡査に見咎められて、押し出されて居ます隙に私は漸つと忍んで入りまして、方々貴方を探し廻つても何うしても見附かりませんでしたので、眞實に何んなに焦れて居たか知れません……今、貴方が……貴方が此處へお出なさるのを見附けた時は嬉しいやら口惜しいやら……私はずう……」

剛 ウム、よく来た」

綾江 では矢張、あの昔の事を忘れなされたのではありませんのねえ……」

剛 ウム……」

綾江 オ、眞實でムんすか、あの眞實に……エ、もうそれで私も安堵しました、た」こんな嬉しい事はありません、剛さん、十何年の間、私も随分苦勞

「教しましたよ……」

剛ウム、然うだろう、然うだろう……察して居る」頷く。

「そんなに私が思つてゐるのを、貴方は薄情な事をなさる方ではないと思ひながら、昨日の仕打があんまり酷かつたもんだから……氣狂だろうなんて、あんまりな事を仰るもんだから私はもう……死んで了はうかと思ひましたよ」

剛ウム……察してゐる」

「それからねえ、あの……貴方はもう奥さん見た様なものがありますのねえ」

剛見た様なもの……奥さん見たやうなものが……」

「ハイ、奥さん見たやうなものがありませんのねえ、あれは一體何うしたの奥さんぢやありませんか、然ういふ約束でせう、私が眞實剛ウム……それはまア、そんな約束があつたかも知れんが……綾江、鬼

頭剛は司法大臣になつたのだぞ」屹度なる。

「まア、……大きな聲をなさつて、私吃驚しますわ、……貴方が豪い方にも成りなさつて、私も眞實に嬉しうございますわ、こんな嬉しい事はありませんよ」

剛ウム、汝も嬉しいか、喜んでくれ、兎に角高知縣の片田舎に、小學校の教師で燻つてた自分が今日は一國の大臣となつて、五千萬同胞の安寧幸福を兩の肩に擔つて起つ……愉快さ、こんな愉快な事はない」

「眞實に豪い出世をなされたのね、あの時から私は大臣になるのだ、總理大臣だなんてよく仰つてゐたけど、とう／＼それが眞實になりなかつたのだから豪うムいますわ……だがね剛さん、あの奥さん見た様な人は何うしたのですかね、私を氣狂だなんて、あの人の前で何故あんな酷い事を云ひなすつたの？」

剛私が今日あるに至つたのも、云は、あの婦人が一臂の力を借してくれたからぢや、元より私は女なんかの力を藉つて事を爲る様なそんな意入

地なしぢやアない、自分の腕と脚とで何處へても遣つて行くのだが、喰しい高山へ上る折には、時偶焉葛羅の御厄介にもなるやうに、政治家の出世には金が要る、その金の蔓になつて山の上へ手早く己を昇らせてくれたのは先づあの女だ、今ではあれが私の奥ぢや」

貴方は、私を何うしてくれてるんですね、私だつて貴方の爲には、それはそれは容易ならぬ苦勞してゐるぢやありませんか、……剛さん……人は豪くなつたら薄情になるもんですかね」

剛さんな汝のやうに、何歳までも大きなねんねえて居ちや仕様がないう家鴨の卵子を孵化したからつて、牝鶏が一緒になつて大河へ泳ぎ出された譯のものぢやあるまい、物事は同じ道理さ、昔とは違つて、この頃は些とも閑の無い體だから昨日云つた事はもう今日はすつかり忘れて了ふやうな事もないではない、何んな約束があつたか知らんが、鬼に角一昔の前は夢だと思つて諦めてくれ」

……そんな事を仰やつたつて私は承知しませんよ、あの時の事を何うしたつて忘れられるもんですか、ハイ死んだつて忘れられやしませんよ……貴方が愈々東京へお出なさるといふ朝、村の端の土橋の處迄私が送つて行つて、『心細いから早く歸つて来て下さい』つて、つい泣き出しましたら、貴方は私の背中を撫つてくれて『心配するな、今に出世して歸つて来るがら』つて……寒い、寒い秋の事で、真白く降つた欄干の霜が、二人の涙が懸つたものだから指で押したやうに消えて黒くなつたのを、二人で見ながら又泣いて、手を堅く握りしめたのぢやありませんか……あの時の事は今も私の眼の前にあり、く……ハイ、あり、くと残つて居ります、この手と、貴方の手と……一寸と手を借したつて善えぢやありませんか、邪慳におんななさつたのねえ……否え貴方、そんな事を云へた筈ぢやありません、何うしても私を奥さんにして下さいませ、剛さんお願いして貰ひて貰ひて貰ひて貰ひます」

剛「コレ、そんな大きな聲をするな……人が来るといけない……何しろ今日は取込んでるから、又逢つて話をせう」  
綾「そんな事を云つて又私を欺さうといふんですか、そりやいけませんよ、剛さん……」

剛「欺しやしない、今日は大勢、人が来てるからな、又ゆつくり話をしやう……然う明日の晩……幸、關口の別荘へ行く用事もあるからな」と云つて、何事か小聲で囁く。

綾「眞實ですか、眞實ですか……そして私をあの、奥さんにして下さいませかね」

剛「萬事は明日の相談さ、今日は直ぐ歸つてくれ兎に角、早く……」  
綾「違つちや思てムいますよ……違つたら又玄關へ参りますよ、今度は死んでも動きやしませんから」

剛「大丈夫だ……ア、人が来る、早く……早く」  
○藤子夫人出来る。

藤子「貴方……貴方……些いと……些いと、大垣總理様が……」  
剛「オ、何か用か……」

藤子「今のは……今の女はありやア何んでムいますの？」

剛「ウム……何んでもない、女だ、女だ」

藤子「何んな女でムいます、何者でムいますの」と屹度なる。

剛「矢ッ眼女だ……汝のやうに格氣深い女ぢやハ、ハ、ハ」

藤子「アラマア……眞實にお口の悪い」

(其二)同茶室の場

鬼頭剛、夫人藤子、和服に着替へて着坐、

剛「イヤ、何うも今日の園遊會も首尾よく済んで先づ結構だな、何しろ何百人といふ客だから汝も一通りの骨折てはなかつたらう、私も随分と草臥れて了つた、お茶が出来たら一服、早く持て来てくれ」

藤子「さア、召上りませ……」

剛「酒でも強いられて食べ過ぎたのか、それとも草臥れの勢か知ら、汝何んだか顔色が善くないやうだぞ」

藤子「ハイ……然うかも知れませんが」

剛「知れませんが……何うしたといふのだい、頭痛でもするのかい」

藤子「頭痛もしますでせうよ……私は心配でならん事がありますから」

剛「心配でならん事……何ういふ事かい、私に打明けて相談したら善いぢやないか」

藤子「こんな事を云ふと又貴方に冷嘲されますから、私はもう何にも申しませんが……」

剛「私が冷嘲す……何んな事だい、冷嘲すのも時に依る、真面目な相談な

ら真面目で聞くと、つまらない事を云はないで打明けて見ろ」

藤子「何うせつまらない事でういますけれど」

剛「云つて見たら善いぢやないか……ウム、あの、女の事かい、ウム、あれか、あれならば大笑ひだハハハハ」

藤子「貴方は何時も口頭で善い加減に私を胡魔化してましたひなさるけれども、私だつて然う何時迄も貴方に胡魔化されて居やしませんよ」

剛「何に、汝を胡魔化す……詰まらない事を云ふぢやアないか、何も汝を胡魔化す必要がないんだもの、あの女の事なら昨日、お父さんやお母さんの前でも打明けて話して聞せたやうに、私が土佐に居た時分世話になつたといふ關係丈に過ぎないのだ、それを玄關へ押掛けて来たなり、今日なんか園遊會の混雑に紛れて庭先へ忍び込んで来るなんて、不埒な事を働くと警察へ引渡してやつても構はないのだから、大人氣ない、そんな騒にも及ぶまいからあの儘見送してやつたのさ、あんな蠅の様な者が汝の氣に懸るのかい」

藤子「だつて、貴方はそんな事を仰つてるけれども、向は遙々、土佐からさして尋ねて来てうるさく付き纏ふてゐるのですもの、深い仲でなくては、そんな事のあるう筈がありません、口では善い加減な事を仰つて、貴方も心の底では萬更憎いとは、思つて居なさらないでせう、私に然

S. 0



う隠し立てせなくても妾に置くなら置くと、ちやんと然う云つて下から  
剛馬鹿な事を云ふな、土佐の田舎の四國猿をわざわざ引張つて来て妾に  
しなくとも、美しい女なら東京に幾何もある」

藤子「あの人も一寸と美しい女ぢやアありませんか、それに貴方のお世  
話をしたてたといふのですから恩も義理もありませうし、貴方も其處は人  
情であまり辛くも當られませんでせうねえ」

剛人情だ？、何が人情だ？、此方から頼んで世話してくれと云ひはすま  
いし、向が勝手に世話をして勝手に騒いでゐたんだもの、些とも人情の、  
糸瓜のと、そんな言を云ふべき筈がないぢやアないか、恩だの義理だの  
なんて云ふ言葉は畢竟一本立ちの出来ん無益男が他のも陰で立行く時の  
都合の好い様に作つたものさ、己のやうな國家の爲になる人間の世話を  
するのは、寧ろ國民の義務と云ふべきだ、己はそんな事を意に介して  
様なる小い頭の人間とは顔が違ふよ」

藤子「けれども貴方、其時は貴方だつて矢張、あの女を可愛がつて居たの

てせう、今こそ考が違つてらつしやるか知れないけれども、その時は、  
ねえ、貴方……」

剛昔の心は今の心では解らないさ、そんな事は何うても善い、今日は一  
國の政を預る大臣ぢや、女なんか云ふものは一切、己の眼中にはないよ、  
先づ草疲休の烟草位に思つてりや大した間違はない」

藤子「……ては私もあの、貴方の烟草入なんてすかねえ」  
剛「ハ、ハ、ハ、イヤ、藤さんは己の巾着だ、ま最一つ、お茶をくれ……」  
藤子「……眞實に呑氣て入らつしやるのねえ、貴方眞實に私を見捨て、は  
いけませんよ、四國からわざわざ尋ねて來たりなんかする執心深い女が  
あるんだもの、私眞實に心が、りだわ」

剛もううるさいよ、そんな事を……彼奴は多少の旅費を遣つて、國へ追  
返しやそれて埒が明くさ、藤さんだつて私と結婚した當時は随分妙だつ  
たぜ、先刻も小田川の明君に一寸と庭先で逢つたもんだから私から話を  
仕掛ると向ては黙つて、つんくして逃げて了つた、今日なんか珍らし

く園遊會へ遣つて来たのも矢張汝に未練があるのだな、汝の方はもう大丈夫かい」

藤子「アラ……そんな昔の事を……」

剛「汝も昔の事を云つて私を苦めようとするぢやないか、昔は昔さ、過去を改正する事は人間業では出来ない、否、神様があつたにしてもその神業でも出来ないよ、唯未來は我々の自由の王國だ、これから後の事を考へる方が人間は一番賢いね」

藤子「眞實にね……もう私も申しませんから此から一層随しくね、仲よく暮して下さいましよ」

剛「そんな事は云はなくても分つてるさ」

藤子「あんな事を仰るから私は心が……りて仕様がありませんもの……」

剛「氣の弱い女だなア……オ、ニコライの鐘、あれは十一時か……」

女中「お寢間を延べて参りました」

剛ア、御苦勞」

三幕

(其一)鎌倉河岸宿屋の場

叔母鹿野病臥、綾江介抱してゐる。

鹿野ア、もう善い、もう善い、お蔭で大分潤ろぎました、常時の血の氣の所爲と見えて、何うも熱が潮して、頭痛がしてならんけれど、何、大した事はないのだから明朝頃は、何うしても一番、奮發つて起きねばなりません……それに斯うして何日迄も宿屋で滞溜してた日には、もうお金も無くなつて了ふてゐるのだし、今に身動が取れなくなるなら、何うあつても今夜は汝、剛さんに逢つて話をつけて来るが善えよ、……如何に彼の人が豪くなつてゐたつて、ちやんと一旦約束迄取極めて、彼の人の學問の資本を出して上げてゐるからにや、今日の出世も皆此方のお蔭さ、汝を除けて外に彼の人の奥さんになられる人があるもんかい、一寸

(幕)

とも構ふ事はないから遠慮せずとづか／＼口を利いて、明日にも邸へ乗込んで行くといふやうな事に話を極めて来るが善えよ……」

鷹ハ、叔母さん、あの頭痛がしますれば、手拭でも冷して参りませうか」

鷹否、そんな事は要らないから今云つた事をよく腹へ入れて置くが善えよ」

鷹ハ、私もその覺悟で居ります、剛さんもう自分には奥さんも出来てゐると云ひますけれど、そんな無法な事がありますもんですか、私と一旦彼あして……私の方がもうちやんと定つてゐるのに、後からそんな者が入つて来ましたからつて、それは妾の様なものでゐますわねえ」

鷹オ、妾とも、妾とも、妾なんか叩き出して、汝が本妻の位に直るのが當り前、誰一つ、それに批を打つ者はありませんよ、司法大臣とかいふのは、法律の方の總本山とやらいふ事だが、今の法律にも妾が本妻面をして濟してゐるのを許して置くやうな、そんな不埒な事はありますま

い、妾なんか遠慮せずと、立派に汝が本妻になるが善えよ……」

鷹その妾さんが、剛さんの大臣になるにつけ、金を出してやりましたのださうにゐますよ、何れ丈の金高か知れませんが、ねえ、叔母さん、お金位は何うにかなりさうなもんですわ……頭痛がしますの？

鷹否、何んともない、何んともないのだ……金と云へば汝もあの人の爲には田地やら、家屋敷やら賣拂ふて随分仕送をして上げてゐるもの、その方は何んとも思はないで、先方へばかり義理を立てるといふ法があるもんかい、金づくなら五分五分だと云つておやり」

鷹お金なんか、そんなものは何うても善ござんすわ、唯夫婦になつて貰らへばそれでもう何んにも外に望はありません……私はもう此の願が叶はなければ寧ろ死んで了ひ度いんですもの、剛さんが聴いて呉なかつたら叔母さん……私はもうこれ限りお目に蒐らないかも知れませぬよ……」

鷹オ、察してゐる、汝の心は善う察してゐるが、まアそんな短氣な事

を云はないで、腰を強く話を持込むが善えよ、剛さんが人間なら忌と云はれた義理ぢやアないよ……けれども、人は見かけに寄らぬものと云ふが、あの人がそんなにア、猫を冠つて長年の年月の間、汝を欺し、親族の者までも欺し込めて居たのかと思ふと、私は腹が立ち、胸が沸えくりかへるやうだ、汝の母さんへの云譯に、何んなら、私が一思にあの剛奴を殺して了つて……」

鷺叔母さんがそんな事を仰やると、私はもう眞實に剛さんが私を欺したのだと思つて、落膽して了ひますよ」

鷹オ、汝のやうな正直な、悪氣のない女を騙し込むなんて、男つていふ者は眞實に鬼か蛇の生れ替りだのう……大臣にでもなるものは、矢張り人を踏倒して、平氣で行くやうな度胸がないと務まらんものか知らんて……」

鷺何んだか私は胸がどき／＼して來ましたわ、……然う仰やるのを聞けば聞く程、眞實に、剛さんは昔とはすつかり様子が違つてゐますから、

今夜私に逢つたつて又善い加減な一寸逃れを云ふのかも知れませぬねえ、もう私も覺悟して居ますから、そんな口先には乗らないで……叔母さん……一所に死んでくれと云ひませうか」

鷹エ……汝、一所に死ぬ……」

鷺ハイ……女房も子もあるから夫婦になれないと云ひましたら一所に死んでくれと云ひまする、一所に死んでくれれば私、嬉しうムいますわ」

鷹死ぬつて、エ……死ぬつて、汝……それでは叔母さんは何うします」

鷺叔母さん……眞實に貴方には濟みません……これまでの御恩報もしないで、私が先へ死んだりなんぞしては、眞實に申譯はありませぬが……何卒赦しなすつて下さいまし」

鷹野……死ぬなんて、そりやア汝、あんまり無分別だ、そんな短氣な事はせずと、又、その節は私が外に思案もあるから、死ぬなんてそんな馬鹿な事は云ふても呉れな、私は又心配で、氣分が悪くなつて來るか

らの、綾江、……汝まだ廿六七の若盛で、然う思詰めた事をせんでも善

「さ」  
 尊だつて、叔母さん、私の思が届かなけりや、百まで生きてゐたつて、私には些とも嬉しかアありませんよ……彼のひと一所に死んで貰へば、私は嬉しうムいます」  
 奥あんな薄情な男を命にかけて暮らしてゐるかと思へば、私が體は何うなつても、汝等二人夫婦にしてやり度いよ、……男つて云ふものは何うしてまア、女の子を泣かすのだからねえ……綾江、……私は汝が可愛さうてならないよ」  
 叔母さん……何うして私は、あの人を思切る事が出来ないのでせうねえ……」  
 暫らく愁嘆の體  
 奥ア、もう時が移る、ちらほら電氣燈が點いてゐるよ、化粧はもう済んでゐるのだな、それでは早く衣替をなさいよ」  
 奥ハイ……」

○宿の亭主

幸御免下さい、最前宿車を仕立てるやうな事を仰やつたさうですし、又只今は女中共へ、御酒の支度を命合けなされたさうてムいます、實は手前共の方でも先日からの御勘定を戴き度いのでムいます、彼アして一日延び二日延び、今日て彼は一週間にもなりますから一應お仕切を是非も願ひしたいのでムいます」  
 鹿野、當惑の體、「折角私の方にも何うか都合して上げ度いと思ふのです、御存の通の次第で、話は纏りませぬ、私は又床に就くやうな事になりますし、……御迷惑でせうが明日まで……今夜はもうこの娘の身の落着も極るのでムんすから、何卒、今一晩の處御待下さるやうに……」  
 幸段々延引になりました、私共の方でもお待ち申される丈はお待申したのでムいますから、何卒是非一つお願ひします」  
 奥今夜一晩の事ですからね……今夜は此の娘も大臣さんの令夫人にならうといふのでムんすから、それが定まりさへすりや、宿賃は十倍にして

差上げます」

卒「イヤ、十倍とは申しません、御勘定通戴けば結構でムいますから、何卒是非願ひ申します、大臣さん〜つて口癖の様に仰るが、大臣さんもくらひ倒れは此方で大に困りますから、是非御勘定を願ひます」

鹿「今の處、困りますから……何卒明日まで」  
卒「然う〜はお待ち申す事は出来ませんから、失禮ではムりますが、姉さんの、その晴衣でも宿料の方に預りませうか」

鹿「イヤ、これは其……今夜は大切の場合でムいますから、この娘の衣裳を何う斯うといふ事は出来ません」

卒「其方では御都合もムいませうが、此方にも御都合がムいますから、その縮緬の羽織を預る事に致ませう、何卒、然う願ひます」と立かゝる。  
鹿「後生ですから何卒今夜丈、勘忍なさつて下さいよ」

卒「イヤ、もう毎日毎日の日延に大概勘忍袋も綻びましたから、その當繼に羽織丈は是非頂戴致し度い」

鹿「何うあつてもと云ふ事なら、私がこの布子を脱ぎますから、何卒此娘の丈は免しなすつて」  
卒「襦袢では一日の宿料にも踏めません、是非此の羽織なと預け下さいませ」

鹿「古びてゐても糸織の袖ですから、然う安く見倒したのもありません、鹿野は衣物など取り出し、布子と着替へ」

鹿「ア、叔母さん危なうムいます」と、片手に叔母の體を支える、

鹿「一寸その行李を……」  
卒「これでムいますか……」と引寄せ、鹿野は衣物など取り出し、布子と着替へ

鹿「……此處にまだ一二枚私の古裕もありますから是非何卒取つて置いて下さい」

鹿「ア、短刀が……」と行李の中より取出し抜いて見る、  
鹿「これ何をする……」

綾「ハイ、あの一寸と……貴方まで、そんな汚れた浴衣一枚にあんななつて、お寒くはムいませんの、御病氣の處へ風邪でもお引添なつては大變でムいますよ……ね、叔母さん、それでは濟みませんから、私が庫そのこの羽織を脱ぎませう」

鷹「イヤ……イヤ……汝は今夜が大切の場合だから見すばらしい姿をして行つて愛相を盡かされてはなりませんよ」

綾「だつて、叔母さんにそんな情ない姿をさせましては私が濟みませんですもの」

鷹「私は斯うして寝て居るのだから襦袢一枚でも濟みますよ、汝、何にも他人行儀が要るもんかい、さア、亭主さん、何卒これをお預け致しますから今夜一夜、御待ちなまつて下さいまし」

幸「この衣物は婆臭いか、エ、まア仕方がありません、これと云ふも私が決して邪慳な譯ではムいせんが、婢奴があまり甜ましく申しますから、詮事無してムいます、何卒まア惡からず……只今御銚子を持って來させま

す、ハイ……」

〇銚子など出る

鷹「心祝のこの御酒が何卒祝になつてくれれば善いものう」

綾「ハイ……お別れの杯にでもなつてくれねば善ムいませぬがねえ」

鷹「又しても、もうそんな心細い事は云つてくれるな、くれぐれも短氣を

出しちやなりませんよ、烏賊の甲より年の功、眞實に萬事私に相談して

取計らはないと聽きませぬぞ……オ、綾江、汝、今の短刀は何うしまし

た？」

綾「あの、短刀でムいますが」

鷹「オ、あの短刀を汝、今何うかしたてはないか」

綾「ハイ……あの、お母さんから戴いた短刀でムいますか」

鷹「オ、……」

綾「彼なら此所に持つて居ますよ……」

鷹「オ、……汝が持つてゐるのか……そんな者を汝が持つても仕方な

いから、貸せ、貸せ、私が藏つて置くから……」  
 綾「だつて叔母さん……私は要る事がありますもの」  
 鹿「何んの、汝、そんな者が要つて何うなるものか、さア貸せ、お貸しよ……」  
 綾「然うぢやありませんけれども……女の一人歩は物騒てムいますからねえ……」  
 鹿「何んの汝、こんな繁昌な都の中央だもの、そんな心遣が要るもんか、さア此方へお寄越、……お寄越と云つたら」と、武者振付く。  
 綾「叔母さん、濟みませんけれども、此許りは、ねえ……鏡の家は微祿して、今こそ百姓はしてゐるが、元は土佐武士の血統だから、假令孤兒になつたからつて女々しい事の無いやうにと、お母さんかち亡りの時、呉れくも然う仰つたのはありませんか……私もう覺悟を極めてゐるのでムいますから、剛さんの御返事一つで……ハイ、見苦しい事は致度ラムいません……」

鹿「オ、綾江、……それ丈健氣に覺悟をしてゐるのか……けれども、死ぬのは何時でも死ぬるのだから、何卒短氣を出してくるな、短刀なんか持つてゐては危いから、さ寄越せ、此方へ寄越せ」  
 綾「ハイ……私も決して死度くはムいせんけれども……叔母さん、短刀が無くつても、死なうと想へば、綾江は首を縊つてども、川へ身を投げても死なすもの、これは眞實に萬一の用心でムいます」  
 鹿「然う云へばさアそんなものだが、……綾江、決して短氣を出してはなりませんぞ、今汝の身に何う斯ういふ事があつたら叔母さんも死んで了ひます……善えかい、假令剛さんの返事が何うあろうと、必ず一度は歸つて來い、善えかい、死なねばならんのなら、叔母さんが代つて死んでやります、屹度歸つて來いよ……寧ろ私が附いて行かうか、汝一人やるのは心細くなつて來た、私が附いて行く」と立かゝる、踏眼となる  
 綾「まア、叔母さん、御危険ならムいます……もう何卒御心配には及びませんから、……ねえ、何卒、寝んでゐて下さいまし」



鹿「ニ、こんなに頭がふらくせねば、汝一人遣るのぢやないけれども……善えかい、綾江、必ず一度歸つて来てくれ」

綾「ハイ……御心配には及びません……叔母さん、御杯を上げます、式許りでも善いから受けなさつて……」

鹿「オ、……必ず短氣を出してはならんぞ、叔母の生命が大切なと思ふたら必ず歸つて来いよ」

綾「ハイ……叔母さん……御心配は要りません……」と顔を反けて「……叔母さん何卒、御體をお大切にねえ」

鹿「更まつてそんな事を云はないでも」

綾「何んだか私も叔母さんのお目に惹れないやうな氣がしますもの……」

鹿「エ、又そんな事を云ふのか、……剛さんが何と云つても、自分で短氣をさい押へてゐれば負傷誤はなくても濟む、侍つてゐれば又花の咲く時節も来るからの」

鹿「叔母さん、貴方それではお寒くはありませんの」云つて、俯向いて、

手巾を嚙しめる。

鹿「何、寒いものか、オ、汝何んだか顔えてゐる様ぢやないか」

綾「……こんなに迄思つてる私の氣を知らないでまだ欺さうとしてゐますのなら……叔母さん殺してやつたつて罪にはなりませんのねえ」

鹿「オ、眞實に……何んなら私が、あの薄情者の剛を刺殺して、汝のお母さんへ云譯をしたい位だよ……けれども綾江、短刀は置いて行つたら何うだよ」

綾「……こんな氣が起るなんて、私は自分で自分が情けなくなつて來ますのよ……」

○女中入來り

「お車が參りました」

綾「……それではもう私は參りませう」

鹿「善えかい、めつたに短氣を出してはならんぞ……必ずも一度歸つて來いよ……あの、短刀は置いて行けば善えに」

綾「……ハイ……行つて参ります」起上つて、行掛けて、また駆戻り「叔母さん、一度よく顔を見せて下さい……何うして涙が出るのでせうねえ」

奥「短氣を出してはならんぞ……」

綾「ハイ……では行つて参ります」又起かゝる、

奥「綾江一寸と待て、帯を直してやりませう」

綾「ハイ……」

奥「短氣を出してはならんぞ、叔母さんが拜むから……」

綾「勿體なうムいます……」二人相擁して咽び入る

(其二) 關口瀧の場

鬼頭剛、綾江同道漫歩の體、

剛「ア、段々と雲が晴れて来て良い月夜になつたなア、もう彼是十一時だ」



ろうが、世間も皆寝静まつて、瀧の音許り耳に附く、ウム……遠方では蛙の聲が時雨の降るやうに聞えてゐるな、こんな景色を見るのは久しぶりだ、何んだか氣が生々とするやうだ」

鯉ねえ貴方、こんな處を二人してぶら／＼歩してゐますと、あの土佐の片田舎の田圃道を御一緒に、斯うして歩いてた時の事が思ひ出されるぢやありませんか、……彼處の森は鎮守様の森に善く似てゐる様だし、あの寺も、それ、村の檀那寺のやうな心持がしますよ、邊を見廻はしても外に人影らしいものはなし、貴方と私と、二人限りの世界でゐますのねえ」

剛ウム……何んだか、昔を思出すと妙な心地がするなア」

鯉私は何時までも斯うして二人限りで居たらう思いますよ、もう此盛夜が明けなくて、お月様も彼處に静坐としてゐてくれれば善えと思ひますわ」  
剛相不變呑氣な事を云つてゐるぢやないか」

鯉相不變だつて、私の心は昔と些も變つた事はありませんのですもの……

「剛さん、貴方も何卒私を可愛さうだと思つて下さい、ねえ、昔のやうに、相不変可愛がつて下さいまし……」

剛ウム……今夜は妙に、昔の事が思ひ出されてならんよ」

綾私だつて左様でムいますよ、……ねえ、貴方は眞實に優しい、信切な方でしたもの、些でも貴方を怨むやうな心を出しては済みませんわねえ」

剛恍惚とせし體より醒め「ア、風が冷い、……酔醒めか、身慄がつく、綾江、まア此處の石へ腰なと掛けて話を始めやう……霧から客來續きで

大さう待たせたなア、家の内では却つて人間もあるから庭先を散歩しながら話す氣で、つい、月に浮かれてぶら／＼此處まで出て来て了つたの

だが、此處の方が何彼と邪魔がなくて氣樂で善いよ」

綾……ねえ剛さん、昔の事を思ひ出して下さつたら、私を家へ入れて奥

さんにして下さいまし、貴方の様な側のある人が、妾、侍妾を持つてお

居なさるのなら、私は何とも申しません、……ハイ、それ位の事はもう

仕方がないと、諦めて居りますから、何卒、私と一緒に、夫婦になつて

暮して下さいまし、お願ひでムいます、私が一生のお願ひでムいます」

剛綾江、……汝は矢張分らない事を云つてるのだな、妾、侍妾なんて、

そんな者は別に必要がないから私は置かうとも思はないし、今の奥は、

彼は義理ある中で、已に子供まであつて見れば罪も落度も無い者を謂な

く追ひ出すとか、離縁するとか云ふ事の出來ないのは、三歳見にても分

つて居やうぢやアないか……そのみならず、私は昔の剛では無い、一

國の大臣、前とは身分が雲と、土と程違ふのだから夫婦に成り度くても

なれまいぢやアないか」

綾だつて、義理と仰やれば、私の方が先ぢやありませんか、そんな貴方、

……無理といふもんです、貴方が無法な事を仰るといふもんです、身分

が違ふから夫婦に成り度くてもなれないつて、それはあんまり……あん

まり薄情ぢやありませんか、私は大臣さんの奥さんにならなくても善ム

いますから、剛さん、貴方の奥さんにして下さい、……大臣になつたか

らつて、戀も情も貴方は捨て、了ふと仰しやるんですか、大臣なんか私

は何ともありません、夫婦になる妨物なら打捨つて了つたつてそれが何  
んですか……剛さん……矢張、貴方は昔の剛さんぢやアありませんのね  
え」

剛「コレ、そんな何時までも十五六の娘ぢやあるまいし、やんぢやを  
云ふて人を困らすものではない、本来から云へば大臣をも務めてる私と、  
一緒に斯うして歩くのも汝の名譽といふものぢや、粗忽かに思つてはな  
らんぢやないか、汝の様な者には一面の識もないと云つて、私が飽造門  
前拂を喰はすれば、汝はそれ限、泣寝入に了るのだが、弱い者を虐める  
のは眞實に強い者ではない、何とが汝の身の利益を計つてやろうと思へ  
ばこそ、今夜斯うして會つたのぢやアないか、少しは分別といふ者が無  
けりや、人間も驢馬と違つた處はないのぢや」

賢「ハイ……貴方の眼から見たら人間ではないかも知れませんが、私はそ  
んな名譽とやらも、利益とやらも要りません、昔の儘の剛さんになつて  
下さつたらそれが何より、私は一番嬉しうムいます……剛さん、こんな

に迄私は思つてゐますのに、貴方は私が憎いのでムいますか……」と泣  
入る。

〇荷車を引いて男二人、

鼻唄連の花さへ夜明に開く……何故に開かぬ主の胸……」

甲「……ア、大さう遅くなつちやつた、嫌あめが又寝ないで待つてやがる  
だろが、急いで些とも早く歸らねえと可愛さうだよなア」

乙「己等の様な露草はそんな心配もねえが、冷い床で膝坊主を抱へ込んで  
寝るのも全く気が利かぬえよなア」

甲「オ、七兵衛、それ、新田のお鍋ッ子が疾から汝に岡惚しやがつて、骨  
が無けりや一緒にになり度いだなんて、逆血上つてゐやがるぢやねえか、  
何うだ、己が一つ取持ちか」

乙「斯う甚太兄哥、如何に破鍋に綴蓋と云つても、あのお鍋ッ子の、棕櫚  
箒を束ねたやうな赤縮れツ毛の才榎頭と、大道曰よりも大い白尻を抱へ  
込まれた日にや、己等の家なんか坐り處が無くなつて了ふだ、まア預

けとして置かうかい」

里ハ、ハ、ハ、酷く嫌はれたもんだな、それでは仲人も願下か、それはさうと、先日からの長雨で、溜が大分酷く鳴つてるやうだな」

乙……畜生、嫉けるぜ……」と剛等二人へ眼を附ける

里……ア、然うだ、恰當去年もこの頃、この下で情死があつたが、情

死なんてこんな無分別なのはねえのう、七公、義理が辛けりや逃げて

了つたらそれで善いぢやねえかよ、情死なんて止す事たぐ……」

乙「淨瑠璃で聞きや情死なんて云ふと些つと乙な者だが、二人続け合つて

引揚られた様ア、肥柄杓にかゝつた猫の屍躰と違つた事アねえぜ、止さ

つしやい〜か」

甲、鼻頭「短氣や損氣よ、損氣は短氣か、死んで花實が咲くもんか……と來

やがるんだ」

乙……時節待たんせ、時節を待たば、煎つた豆にも花が咲くか……止さ

つしやい〜」二人入る、

○ 綾江……剛さん、寧ろ私と一緒に、情死して下さいな」

剛何を云ふッ……馬鹿々々しい事を云ふにも法圖があつたもんだぞ、優

しく出ると圖に乗つて、汝は私を弄ろうといふのか、手鞠とは違つて大

砲の弾は猫の玩具にはならんよ、鬼頭は一國の政治を預る體だ、少と謹

んで口を利け」

綾剛さん、私はもう此世で夫婦になられなきや生きてゐたつて仕方があ

りませんから、それと一緒に死んで下さいと云ふのです……貴方はあん

まりお情ない事を云ひなさるのねえ」

剛昔から女なんかと死ぬ奴は男の屑、生きてたつて世界の廢物だ、私は

今から百年も生きてゐて日本の國民の爲に成てやらねばならん體だ、生

命が二つあつても女なんかと死ぬやうな、白痴な事が出来るもんか、汝

ももう國へ歸つて、何處からか、相應な婿を貰つて、百姓仕事でも勉強

して國民たるの義務を果たすが善い、汝から一時借りた學資は十倍にして

返してやる……さア、此を受取つて、明日は早速國へ歸つたが善い、一絡に連れ立つて歩いたのも私が情だと思つて、難有く思ふが善い、が、こんな事は萬事秘密、誰にも云はないが、汝の身の利益ぢやから善く心得て置けよ」

剛さん……夫ぢやア貴方は、眞實に今迄、私を欺してゐたんですねえ、こんなな迄思つてる私の心は些とも酌分けてはくれなくて、薄情な、三年の間も、人の娘を欺してゐましたのねえ」

剛欺すも欺さんもない、さア金は十倍にして返すのだから、汝に云分は無かるうぢやないか」  
金なんか……そんなものを私は貰ひには來ませんよ」

剛さア、まア、……義理張るよりは頬張れた、五千圓の小切手、嘘ではない、月の光に透かして見ろ」  
嘘エ、ッ……こんな者が何んで欲しいもんですか」ピリ、と引裂き、「剛さん、私ア口惜うムいますよ……」

剛氣狂ひだなア、貴様は……」

錢ハ、氣狂ひです、……氣狂ひだから貴方を殺して私も死にます、堪へて下さりよ」……急遽に一刀、肩頭へ切りかける。

剛コレ……馬鹿……コレ……馬鹿もの……氣狂ひめ……」杖にてあしらふ、折から陰に籠つて響き出す目白の鐘の音。

剛剛さん……貴方一人殺すのではありませんよ……」  
剛氣狂ひ……コラ……コラ……婦女子なんかと……婦女子なんかと死んで堪るもんかい」

綾剛さん……私も一緒に死ぬのでムいます……」

剛馬鹿な……」  
剛中、剛、刀を奪ふ、奪はれじと武者振り附く塗端綾江、結局、柵より下へ突落さる。

剛ヤ……瀧へ陥つたか……」驚いてうろくする  
水中の聲「剛さん、あんまり薄情だ……」



剛何處か、……姿が見えなくなつた、……助ける工夫はないか知ら……  
何うもこの水勢では……綾江、……綾江……綾江……エ、打捨つとけ、  
流れる水を堰止めるは、圖畢竟恐だ、彼奴が自分で仕出した事なんだもの  
……ア、痛、痛い、肩先が痛みよる、やられたかな……此處では正當防  
衛、立派に法律が許してゐる、當前だ、打捨つて置く……」

行掛けて思入、又水の面を見渡して

「とは云へ今迄あんなに泣いたり、怒つたりして騒いでた女が、……水  
の中へ流れて了つたといふのは何んだか夢の様だ、綾江……綾江……綾  
江……流れるものは月許り、果敢ない奴だなア……ア痛々、々、」

剛逢つたら面倒だ……と身を隠さんとして「何、司法大臣が巡查位に  
……とは云へ、何んだか、逢ふのが面倒臭いわい」と身を隠す。  
巡查出て來つて思入。

(幕)

第四幕

(其一)鬼頭大臣居室の場

守ねえお父さん……お父さんは此頃毎晩、大きな聲をしてお陰りなさる  
のねえ、僕は昨夜恐かつたわ、動物園の獅子が僕の所へ遣つて來たのか  
知らと思つて、眞實に吃驚して、お母さんへ搔ぐり附いたのよ」  
藤王眞實でムいますよ、昨夜なんか一時過てムいましたらう、大さう陰  
されてお居なかつたから、私が幾度も幾度もお起ししましたけれど唯  
ウーンウーンつて生返事をなさつてた限、十分間位陰され通して傍の者  
は眞實に恐らムいました、些とも御存じては入らつしやいませんの……  
這間の、開口で棚から庖丁が落かつたとか仰やつた、あの肩のお傷は  
もう癒えた様でムいますのに、あれが又痛み出したのでムいますか、一  
體何うなすつたのでせうね……何か心配事があんなさるのですか」

剛ウム、傷もまだ折々は痛むがもう大した事はない、昨夜は唯夢を見たのだ、別に心配事と云つてはないよ」  
守お父さん、何んな夢なの？、鬼が来たの、……幽霊の夢？」  
剛エ……幽霊なんて馬鹿々々しい、今時そんな事を云ふと人に笑はれま  
すぞ、小學校へ上つてゐるものが、そんな馬鹿な、幽霊なんて、そんな者  
が……」

守眞實に幽霊なんか居りませぬの？」  
剛馬鹿者……貴様は余つ程馬鹿だ」と叱る。  
守だつて僕は知らないんだもの……知らないから聞いているのだもの」と  
泣き出す。

剛そんな、お父さんに言葉返すものではありません、もう申しませんとお訊んなさる」

守お父さん……御免なさつて下さい……」

剛ウム……そんな馬鹿な事は決して聞くもんではないぞ、今日の人間が

そんな事を口にすべきではない」

剛……貴方、この頃は何か御心配事があんなさる様子でムいですが……  
……關口でのお傷といふのが何うも私は合點がゆきませんし、内閣からの  
お下りも毎夜更けまするし、それに御寝なさつてから定つた様にうなさ  
れなさるんだもの……少し御瘦せなさつた様にも見受けまするが……

貴方、あの、何時かの綾江とやらは一眸、何うしたのでムいますね」

剛あれはもう國へ追返して了つたのだ、汝も善く下らない事を聴く奴だ  
なア」

剛だつて私……あの、私に、隠立なさるには及ばないぢやありませんか  
と詰寄る。

剛汝に隠す？……何にも汝に隠すやうな必要がないぢやないか、……も  
うそんな事は決して云はないでくれ、私が氣分に障る」

剛あんなに毎夜毎夜、更けてからお歸りなさるのは、何か其處に……私  
は何んだか心配でなりません、そんなに私に隠さなくても善いではあり

「ませんか、斯うなら斯うと寧ろ打明けて云つて下さいまし……守雄、汝はもう彼方へ行つて、學校へ出る仕度をしよ。」

「……ねえ、貴方、あの綾江は何うなさつたのでムいませぬ、そりや昔の深いと馴染なら隠匿つて置いておやんなさつたからつて、私やそんな格氣をするやうな……ハイ、そんなに世間體の狭い事は申されませぬ、何うせ女は男の命令通り、西へても東へても向いて居なけりやならん者てムいませうから、私は貴方のなさる事を何う彼うのと批難する事は出来ませぬ……何うせ私は女に生れて來たのでムいませぬものねえ……」

「何を云ふのだ、詰まらぬ」  
「そんな私にも隠しなさらなくつたつて善いてせう、綾江を何處へも圍ひなかつたのですか、仰やつて下さいまし……肩の傷だつて、矢張り痴話喧嘩でもなさつたのでムいませう……ハイ、存じてゐますよ、何も彼もよく存じてゐますよ、隠さうとなさつたつて、自分で白狀して入つ

しやるのですもの、駄目ですわ、昨夜なんか、唸されなすつてる最中、綾江くつて、幾度も寢言を仰やりました、ハイ、懺か然う仰やりました、そんなに寝てまで夢にお見なさる様な中なんですもの、私の様な者は何うせ未始終と氣には入りませぬ、ハイ、何日か貴方に見捨てられて了つて、悲しい目を見ねばならぬのでせうねえ」

「剛うるさいなア、そんな事を何時迄も云つてゐるのか、己はそんな事に係つてゐる隙のない體だ、一國の國務に關して肝胆を砕かねばならぬ責任のある體だ、……夢にてもそんな事を思つてはならぬ……夢なんかそんな者が……夢を説くは畢竟痴人さ、下らない事はもう云つてくれるな」

「驚けれども私は矢張心配でなりませぬわ、打明けて云つて下さつたら私も別に心配は致しませんもの、ねえ、貴方……」  
「剛打明けて云ふ……何を云ふのだ、歸宅が遅いのは、それ、常時云つてる通、東郷海軍大臣が数日前から急性肺炎で以つて、もう危篤など云ふ場合だから、見舞や、看護旁々行つてゐるのだと、度々云聞せてあ

るのぢやないか、東郷さんは云はば我内閣の棟で、あの椅子が空くと、政友黨と急進黨との権勢争から又内輪に紛擾が起つて来るし、加之、今日我内閣と貴族院との調和を保つ上には東郷さんは是非なくてはならぬ人、その棟が抜けて了つたら後が甚だ氣遣はしいので、今の中、善後策を講ぜんけりやならん、それやこれやで奔走もし、心配もしてるといふ次第、汝に云つた處が分らない事だけれど、まあ、そんな次第だから汝何にもそれを心に掛けるには及ばないぢやないか」

藤子「眞實にそれッ限り……眞實にそれ丈の御心配なのでムいますのね？、……」と少しは安堵の體

剛「然らうさ、……女子供の心配と、一國の政事を預る大臣の心配とは至て品が異つてゐるのぢや」

藤子「けれども貴方、妻の身になつて見ると、夫の浮氣が一國の政事よりも心配でムいますわ」

剛「下らないッ……」

守雄、保姆と連立つて入来る、「お父さん、學校へ行つて参ります、お母さん……」

剛「オ、儘かきやつて来い」

藤子「勉強してゐてなさいよ、……又途中で梳白して、他家の子供を泣かせたり、犬を喧嘩させたりなんかして遊んでゐてはいけませんよ」

守「オ、イエス、マンマー、グッド、バイ……」

○

取次の執事名刺を差出し「エイ、御前様へ申し上げます、只今此の方々が御前様へ直接御面會なさつて、極内密な話が致し度いと申して居られますが、如何計らひませうか」

剛「打見て「馬淵警視總監、小倉檢事正、同道と見えるな、内密！それでは此室へ通すが善かろう」

藤子「小倉なんて方はめつたに入らした事がないではありませんか」

剛「ウム、何の用か知ら……」と思案顔、

馬淵警視總監、小倉檢事正、同道入來る、挨拶簡單、剛は藤子を去らしむ。

馬淵例の獵官運動の不平連がしきりと内部から煽てますので、急進黨と政友黨の内訌が出来かゝつた様な形勢に見えました。それでも例の地租増額案は無難に衆議院を通過しましたので、一先づ御安心で下さいませう。尤もこの上、貴族院といふ難關がありますし、かゝる折の調訂者ともいふべき東郷大臣があつた御病氣と来て居りますので、閣下の事だからいろいろ御成算はありませうが、又何彼と嘸御心配の多い事でございませう。剛いざ其局に當つて見ると、岡目で見てる程巧く碁は打てぬものさ、けれども何、活死の目に逢つて、旨く勝を制するのが眞の手腕家だ、貴族院なんて大きな面をして威張つてた處が眞實に手の附けられない虎のやうな剛の者は五人か六人、後は大抵、金か爵位かて頭の一つも撫ててやればごろ／＼喉を鳴して猫の子のやうに柔しい聲を出す手合許りだから、

愈々となれば、まあ大した配慮は要らんだらうと思ふよ」  
馬それも然うてムいます、兎に角、明治の人間は金を神様にしてゐますから、一時はあの、海の荒れる様に騒ぎ立つた獵官連中も、金の御幣が雲の間から現はれると忽ち天下泰平、地租案も難船せずと通過しましたのを見ますれば、案じるより産むが安いものでムりますな」  
小倉馬淵君なんかも其神様の神主になつて大分、金の御幣を振廻はした仲間らしいが、併しあまり遣り過すと、司法權は何時迄も壓や壓にはなつてゐないから、大抵の處で切上げたら善かろうと思ふ、上流から盛んにパチルス流すんだもの、イヤ下流、今日の腐敗は咎める事は出来なものの、可愛さうぢやないか、君、僅か十圓か百圓かをせしめた小泥棒は赤い仕着に臭い飯のお宛伺を戴かされてゐるが、十萬圓、百萬圓の大泥棒と來ては常時フロックコートに絹帽子で、金時計を光らせながら白晝大道に幌馬車を驅つて、未決行の箱馬車へマニラの吹殻を投付けて、舌を出して笑つてゐる、正義は地に落ちて了つてゐるぢやないか」

剛ハ、君は大さう慷慨家らしいが、併し正義よりは仁愛だ、貧乏して  
 てる代議士連に政府から御慈悲をかけてやる分なら、つまり釋迦や孔子  
 の教にも悖つてはゐない譯だ、賄賂なんかといふのは、あれは要するに  
 目上の者へ補の下を使ふ事なんて、代議士連が會社や團體と結託して、  
 其私の利益を計らうとする様な場合には即收賄だ、濫職法でどしく檢  
 舉してやり給へだが、政府からの特別の御手當は、今云ふ通り、それ、仁  
 愛の部類に屬する、つまり國家、社會全體の福利増進の爲めの一手段で、  
 普通の青草許り宛飼つてゐてはみぢめだ、折々、麥や米で腹を肥させて  
 牛馬を使ふやうなもの、無智無學の彼等を制取するには止むを得ない方  
 策だから、小な正義とか、道徳とかいふ杓子定規を持つて來て大鎗を押  
 へやうたつてそりや駄目だよハ、ハ、」  
 夫人藤子、次室にて立聞き居る。  
 馬淵時に閣下、今朝斯うして打揃うて伺ひましたのは、實は妙な事て」と  
 邊見廻し小聲で云ふ。

剛はア……何事かな」

小倉實は何處で教へられたものか、昨日、一人の老婆か検事局へ参りま  
 して、綾江といふ自分の姪が鬼頭大臣の別荘へ行つた限、もう一週間も  
 歸つて來ない、行衛を搜索してくれと、こんな門違ひな事を申込みまし  
 たのでムいます」

馬、それで神田署の方へ更に其事を願ひ出ましたさうで、同署から伺ひが  
 参りましたが、その綾江と云ふのが宿を出た限、一切歸つて來ないので、  
 その老婆、慥か鹿野と申しますが大さう心配しまして、病氣を押して此  
 方様の門前へ伺ひましたら巡査に叱られて追ひ返され、失踪なら警察へ  
 といふので、其手續に致したさうにムいますし、検事局へも門違ひな事  
 を云つて出たのださうにムいますが、私は兎に角、右の老婆を呼んで、  
 事情を……そのまア、些と、譯を聞きました上、それでは大臣が……閣  
 下が多分何處かへも預けなさつてる様な事だろから安心せいと、まア  
 一時の氣休めを云つて引取らせましたのでムいますか……」

「少、それで、私も少々他の事件に就き馬淵君へ打合したい事があつて参りました節、この話が出て一段と小聲になり……」  
 巡査が、あの、關口の瀧の邊で血痕らしいものを認めたとかの報告があつたと云ふ事を耳に挿みますし、旁々早朝連れ立つて伺ひましたのでムいしますが……先日閣下は負傷をなさつたとか伺ひますが、もう御快しいのでムいしますか……」  
 剛ア、棚から牡丹餅でなくて、庖丁が落ちよつたので、ハ、ハ、ハ、負傷と云つて蚤の食つた程の事さ……フム、兎に角、それは御苦勞さまだつたが……併しそんな事は私の秘密ぢやから御兩君に立入つての御話は御免蒙り度いです」  
 少ではムいませうが、兎に角、人命にも關する事ですから、私も職を司法官に奉じてゐる以上、聞捨にはなりませんので、伺ひに参りました次第です」  
 馬小倉君の様に敢て角立つて申すには及びませぬ事ですが、唯、念の爲めに伺ひしましたのですから何卒まあ不惡……併し、何處かへも預けな

さつてるやうな事でもムいしますと敢てその……そんな秘密に立入るは職權外ですから何うもその……アハ、ハ、ハ、ハ、」  
 剛私が女二人隠匿つて置かうと何うせうと、それは私の自由だから君等は敢て干渉せんでも善い事ぢや」  
 馬大臣が妻の二人や三人、……そりやア然うてムいします、我々が敢て夫を何うもアハ、ハ、ハ、ハ、小倉君なんかあまり眞面目に解釋して居りますので、大さう事が面倒のやうに聞えましたが……女の一人や、二人、アハ、ハ、ハ、ハ、」  
 少向の婆さんも大さう心配して居りますから、當人に丈は其預け場所をお洩しになつてもよろしいではありませんか」  
 剛それは又機を見て云はう、私は司法大臣だから法律の網の掛外しは萬事私が掌中に握つてゐるのだ、蜘蛛だつて自分の張つてゐる網に罹つて死ぬ様な馬鹿な事はせんから、そんな事は御心配下さらんでよろしい、私が秘密は當分私が秘密にして置くより外に仕方がない、婆さんへは手當

を遣つて、國へても歸すやうな處置をしてやるから、その方も別に心配  
せんでゐて下さる」

馬一體、こんな差出がましい事は申上るには及ばないとは思ひましたが、  
つい小倉君に勘められまして、大きに何うも失禮しました」

小何うも大きに失禮を申上げました、……併し閣下、今日は刑事被告人  
が皆狡くなりまして、いろんな抜道を拵らへては置きますが、如何に法  
律の網の目を破る大鳥でも天の網は免れませんでせうねえ」

剛それは然うかも知れないよ……」

馬何んだか此頃は御色艶が善くないやうてムいですが、強て御悪い處も  
ありませんのでムいますか」

剛大臣になると心配事が多いよ」  
馬何卒、國家の爲めに御自愛なさるが肝要てムいます」

馬淵、小倉、兩人の歸るを室の口まで見送る、藤子夫人出て來り、剛

を後より引きて

藤子貴方、私は聞きましたよ、大略の様子は彼室で聞いてゐましたよ、  
まア、此處へお坐り遊ばせ……貴方は綾江を何處か隠匿つてお居なさる  
のですつてねえ、何も彼も聞きましたよ、ハイ、何うせ私は貴方の御氣

には入りませぬ、男は姦通をしても善いのでムいますか、ねえ貴方、貴方、  
ありませぬか、男は姦通をしても善いのでムいますか、ねえ貴方、貴方、  
……私は口惜うムいますわ」と怨む。

剛うるさい、又そんな邪推を廻して自分て獨焦れてゐるのか、そんな事  
て大臣の夫人たるに耻ぢないと思ふか」

藤子ハイ、私は何うせ大臣の夫人たるには足らないもんでせうとも、……  
だから、あの綾江を何處かへ隠匿つてお居なさるのですか、開度うムい

ますよ、貴方、聞かして下さいまし、貴方が今日の地位は何うして出來  
たのでムいます、そりやア貴方は元來、お蒙り方ではありませうけれど

も、金力がなくては出世が出來ないのだつて、何時も仰つてたて



はありませんか、貴方は誰のお蔭で大臣になれるやうな地位が得られたので、ムいますね、些と私の身になつても考へて見て下さいまし……」

剛「くだい、そんな氣樂な事を聞いて居られる體ではないわ」  
藤王「氣樂な事ですつて……氣樂な事ですつて、まア……男つて、そんな氣の強いもんですか、私は一生懸命になつて云てるのでムいますよ、私は貴方の體へは誰だつて、親だつて、指一本當てさせ度くないのでムいます、一概に格氣だと仰やるけれども、私は貴方の妻になつてからは……ハイそりや昔はいろんな事があつたにしても、今はもうこんな、萬人に勝れた夫を持つたのは、女に生れた身の果報だと思つて、戀も義理も何も彼も貴方の爲には捨て、了つて、些とも惜いとは念はず、今日まで一生懸命になつて仕へて來た氣でムいます、足らはぬ處は澤山ありませうけれども、私は私に出来る丈の事は盡してゐる氣でムいます、貴方の他に、何にもこの世に惜いものも欲いものもありません、だから貴方も……」

剛「くだい、分つてると云ふに……」

藤王「否えまだ分りません、私の心が貴方に知れてゐませんから、貴方はそんな妾なんか……舊の情婦なんか隠匿つて、私に隠して樂をなさるのです、私は決して貴方の體に他の女が手を當てるのを黙つて見てゐる事は出来ませんよ、ハイ聞くのさへ忌でムいます、それに貴方は、善い加減に私を胡魔化して、了はうとなさるんですか、あんまり……あんまり酷うムいますよ……」

剛「うるさい奴ぢや、人の氣も知らないで……汝の没分曉にも困つて了ふぞ」

藤王「ハイ、何うせ没分曉でムいますよ、自分では勝手にそんな真似をして置いて、眞實に男なんて云ふものは、我儘勝手な事許りするものでムいますのねえ、貴方がそんな事をなさるのなら私だつて仕度放題しても善ムいますか、貴方、女だつて、然うく馬鹿にされちやあせんですよ」

剛幾何云つても分らなけりや勝手にしろ、此方には國家の御用がある、女なんかの愚痴を聞いて居る隙があるもんかい」と振り放す、藤子「まア、貴方、些いと……」

藤子後見送りて、手巾を顔に當てながら「眞實に何うしてまアあんなに邪慳に……」先頭から、何うも心配事がある様子だから、妻には秘さないで打明けて下さいと云へば、常時、うるさいと云つて權柄顔をなさるんだもの、何うした事かと思へば矢張私には云はれぬ秘密、舊の情婦なんか引ずり込んで何處かへ隠して置くなんて……眞實に口惜しいつたらないよ、一つお父さんやお母さんへ相談して来て見ませう……折角善い男を夫にしたと喜んで大切に掛けておれば又こんな心配事、もう女なんかに生れて来るもんぢやないんだね……」手巾を噛みちぎる

(其二)同門前の場

鏡鹿野、取亂したる體にて登場

「眞實に、あの綾江は何うしたといふのだから、あれ又云つて置いたのだからまさか死ぬやうな事はあるまいし、剛さんに何處かへ隠匿はれて居るのなら又その様に葉書の一つでも寄越してくれば私も安心してゐるものを、何が何やら盛張様子が分らない、病揚句ではあるし、年老の身で、警察へ行つたり、検事局とやらへ行つて見たり、それは方々耽廻つての心配許し、今日は是非共、剛さんに逢つて様子を聞かないと、斯うしてゐる間も心がかりで仕様がな、厄介な事が出来たものだ」

門前をうるくする。門前の巡査「コヤ、又汝來よつたか、此邸へ來てはいかながな、返るが善か、早く返るがよか」

鹿野、今日は何うあつても剛さんの御目に蒐らなけりや返りませぬ」  
 巡強情張つても何うもならん、大臣閣下の事を剛さんなんかと呼捨てにしちよるものが何處の世界にあるもんかい、汝少と氣が狂ふちよるな、早く歸るが善か〜」

鹿私が氣狂なら世間の人は皆大氣狂、剛さんつて剛さんの事を云つてゐるに、別に何にも不思議はありません」

巡そんな事云ちよるから氣狂と云ふのだ、早く歸れ〜、門前でそんな立つてゐるは何うもならん、早く歸らないと、貴様處分するぞ」

鹿處分するて、私は剛さんの奥さんになる人の叔母だ、そんな失禮な事云ふものではありません、巡査の癖に」

巡何云つちよる、不届阿魔め、貴様は官吏侮辱罪だぞッ」と立ちかゝる。

○處へ門内より車を引出す、車上には藤子夫人、外出衣装、紫緋子の蝙蝠傘などさし懸してゐる。

鹿野、屹と見て「ア、汝さん、綾江は此の家内に居りますか、何處か

へ預けてあるのですか、一體何うしたのですか聞かせて下さる」

藤子「ヤ……汝さんはあの、綾江とやらと一緒に訪えた……」

鹿「ハイ、綾江の叔母です、汝さんは矢張本妻なのかへ、剛さんはまだ、

汝を本妻にして置いてゐるのですから」

巡此奴無禮云ふなッ」と鹿野の頬を打つ。

鹿何するんだよ」

車夫夫人様に向つて無禮を扱すと、溝の中へ蹴飛ばしてくれろぞ、死損

ひめ、其處退け、エ、其處退かんか」

藤子「アお待ちよ……」と制し「それでは、汝さんはあの、矢張まだ東

京に居たのだねへ……そして綾江とやらは矢張……矢張我夫が何處かへ

預けて置いてゐるのかねえ……」と手巾を噛んで口惜しき思入。

鹿綾江に逢せておくれ、綾江に一寸逢はせておくれ……剛さんにも善

く、剛さんが居れば一寸話が仕度いから逢はせておくれ、逢はせておくれ」

藤子「一國の大臣が汝なんかとめつたに御面會はなさらないよ」  
 奥大臣だなんて大きな顔をして威張つたつて、元は皆あの綾江が資送して學問させてやつたればこそだ、自分の力で藝が天上でもしたやうに汝さんまで仰々しく騒ぎ立てるのがちやんちやんちやんち可笑いよ、そんな高慢ちきな顔をしてゐるけれども、今に綾江が眞實の奥さんの位に直つたら、汝さんは臺所の隅で、あの子の食べた飯茶碗の洗ひすゝぎせなけりやなるまいよ、威張るのも大抵にして置く事さ」  
 巡査「コヤ、汝、失敬な、その口が曲るがな」とびしやり  
 車夫「この糞たれ婆め、蹴飛ばしちまふぞ」  
 藤子「汝なんかにまで馬鹿にされるやうな私ではないのよ」  
 奥剛「さんに逢はふ、逢はふ、逢はなけりや此處を動くもんか」  
 巡「コヤ、いかん、此奴警察署へ拘引するぞ」と引立てる。  
 奥私「そんな警察へ引かれるやうな罪は無い、罪の無い者を汝さんは年老や婦人だと思ふて馬鹿にするのか」

巡「それが官吏侮辱ぢやが、来い、コヤ、来んか」  
 奥「罪も咎もない者を汝さんは何故拘引するのか、弱い者や年寄だと思つて、罪がなくても虚めて見るのかい」  
 巡「エ、来い、抵抗するとふん縛つて了ふぞ」争ひながら引立てる。  
 車夫「氣狂婆め、とんだ邪魔をしやがつた」  
 藤子「私は眞實に、心配でならなくなつて来たわ」肩を撞めて胸を押へる。  
 ○下手より藤子の父、石澤岩太郎、母、安野、従妹雪子(明の妹)これは十六七の海老茶袴、手に薔薇の花籠を持つて出る。  
 藤子「アラ、お父さまお母さま、小田川の雪子さんも……今折角、上ろうと思つてた所なりましたよ」  
 当然うか、それは恰當善い處だつた、實は雪さんが病氣見舞に鎌倉へ行つての、其歸途だと云つて珍らしく寄つてくれて叔母の心附で、美しい薔薇の花を持つて来たから、汝に見せて喜ばして上げ度いと斯う云ふので、見舞旁々三人連れてぶらぶら散歩しながら押かけて来たのだ」

安子「剛さんはもうお出かけかい」  
藤子「ハ、ハ……」と涙ぐむ形

雪子「姉さん何うも御無沙汰しました……こんな花なの、ね、輪が大きい  
でせう、わざ／＼鎌倉から持つて来てよ、アラ……アラ……蝶が留つて  
、黄なのと白と屹度夫婦なのよ、一つは其方へ一つはあれ……」  
車夫「一つを手拭で打落す。」

雪「オヤマア……可哀さうな事をしたのねえ……」蝶を拾ひ上げて息を吹  
きかけて「こんなな弱つちやつて、もう死掛つてゐますよ……これは黄  
色なのだから女の方でせうね、柔しい目をしてゐてよ、夫の方は、あれ、  
もうあんな高い處へ……あれ、まアあんな空の方へ行つて了ひましたわ、  
ねえ姉さん、雌の方が死ぬと、傍へ寄つて来て、殺されても離れないつ  
て云ふ動物もありますのに……あの、雄蝶は薄情ですわねえ」  
岩雪さん相不替いろんな呑氣な事を云つてるぢやないか、何時も汝はね  
んねえで、明と違つて罪がなくて善いよハ、ハ、ハ」

母「だつて、眞實に、あれ、あんな遠い處へ逃げて行つて了つて、命が  
惜いからつて、あんな薄情だと私は思ひますわ……姉さん、可哀さう  
ねえ、此の蝶を御覧なさい、こんなにもう、何うしても助命からないて  
せうか」

車夫「恐縮して頭を掻く、」

藤子「眞實に可哀さうねえ、……熊や、汝あんな薄情な事をあしてないよ、  
男つて云ふ者は何うして、皆こんなな気が強いのでせうねえ……あの、  
雄蝶も雌蝶を打捨つて行つて了つたりなんか……可哀さうにまア、この  
蝶はもう死か／＼つて……人事ぢやありませんのよ」手巾で眸を拭く。  
父「藤子、汝、何うかしたのかい」

藤子「否え……何ともしやしません、まア何卒お入り遊ばせ、雪さん、さ  
ア何卒お入りよ、まア見事な花だことねえ、オヤその花までが、今の風  
でほろ／＼散りましたのねえ」

第五幕

(其一)石澤邸後園の場

岩太郎、庭園の松の手入をなし居る、薔薇の鉢、藤棚、葛蒲、など初夏の花、色を競べ香を競ふ、

「ア、人間は此世へ苦勞をしに生れて来たものか一文無から仕上げやうと云ふのだもの、何うせ正直には行かぬ世渡り、高利貸の、御用商人のと、悪口を云はれながらも先づ此の身代まで漕ぎ附けて、兄息子は本人の望通り、英國へ留學に遣るし又妹娘へは善い婿を取當て、今日では大臣の奥方と呼ばれる、やうな身分になり、親同胞も肩身が廣くやれこれてまア安心、日本一の果報者は私が一家ぢやと喜んでゐれば、去年の秋、息子は彼方で死んで了ふし、この頃又、あの婿は元の情婦に心を移して、何處かへ隠匿ふて置き、何んだか娘にも辛く當る様子だとや

ら、それには女の怪氣嫉妬もあるうけれど、男心といふ者はこの頃の夕立雲のやうに何うも的にならぬものだからあの娘の心配も萬更無理ではない、善い植木には虫が附くし、働きのある男には浮氣が附き者、さればと云つて女房一人を大切に守をしてるやうな奴は得て意久地無しのかくざ者、枝振が善ければ幹の恰好が悪いと、花の美しいのは兎角果が實りかねるとか、ア、浮世を圓く渡つて行くのは十五夜のお月さん許、人間は萬事、三日月のやうに、缺けたり曲つたりして送らねばならないものかなア……こんな心配事が次々と湧いて来るのはまだ自分の罪業が盡きないのか、……イヤこれも年老の愚痴か、年は取るまいもんぢやない

○下手より安野、娘藤子、  
安藤藤子が参りましたよ、良君、藤子が参りましたよ」  
岩太郎、藤子か、相不變隠居仕事ぢや……まア此方へ来てお父さんが丹精の花壇でも見てくれ」  
藤子「牡丹なんか、もうすつかり散つて了ひましたのねえ、この前、来た

時にはあんなに綺麗に咲いたものが、眞實にもう、皆葉になつて了つて……之を見ても私なんかも今に、お婆さんになつて了ひますのでせうが、人間も花のやうに果敢ないものでムいますのねえ」

岩「まア今からそんな、抹香臭い事は云はぬものぢや、牡丹が散つても、これこの通、薔薇も盛り、菖蒲も美しう咲揃うてゐる、人間の眼を慰める者は、それからそれへと移り變りはあつても春夏秋冬絶えず續いて居るものぢや、其又移り變りが面白いので、薔薇を咲かせうとて牡丹が散つた、お夏を女中奉公に寄越さうとてお春が宿へ下つたんだと、斯う考へれば悲しくも果敢なくもなくなるものさ、萬事は考へ様一つぢや」

藤子「けれどもお父さん、然う仰やると、他に可愛い女が出来たからつて、私は剛さんに見捨てられましたも、何とも云ふ事は出来ませんのねえ」  
安子「そんなに汝、心細い事を云うてはいけませんよ、汝がその様に心配するのを見まするとお母さんはもう胸が詰まつて来るやうで……」  
岩「それとこれとは又事が違ふ、花と人間とは一つ口に行くものではない

さ、何かい、剛がまだ何うも汝に辛く當るのかい、矢つ張、その、元の情婦を隠匿うて其方へ繁々通つてるのだな、まア腰を掛け、腰を掛けてゆつくり話せ」

三人陶器の支那椅子に寄る

藤子「辛く當られるといふ譯ではありませんけれども、相不變、良人は何時も浮かぬやうな顔色をしてゐまして此方から話掛けても碌々返事もなさらんやうな事がありますし……夜なんか偶々家へ泊る事がありましたも、屹度、寝言には綾江許してくれとか、綾江、今行くからなんて、そんな事許り仰るほどの逆上様でムいますもの、それはまだ善ムいますが、此度は三日程前、邸を出ました限、少つとも歸つて来ないのではありませんか、あんまり酷うムいますよ」

岩「フム、それは何うも……」

藤子「取者や車夫なんかへ申し附けて、行先を突留めさせやうと思つて、いろく工夫をして見ましたけれども、何日も東郷大臣のお邸か、總理

大臣のお邸へ行く外、怪しい事はないと申します、屹度、あの人に餘分な鼻薬でも貰ひまして、善い加減な事を云つてのだからとは思ひますけれども私が自分で出ている、後を追駆るといふ譯には行きませず……眞實にもう私、何うしたら善いませうねえ……」

安子三日も邸を明けてゐるつて、眞實にまア呆れた人だねえ」

藤子昨晚も一昨晚も、今に、歸つて来るか、歸つて来るかと、私は少しも寝ないで待つてたのでムいますのに、人の氣も知らないで、剛さんもあんまりでムいますよ」

安子オ、道理で、大さう血色も善くないやうだ、何んの、そんな無理な事をして體を悪くしないで、さつさと早く寝て了へば善い事に、云はゞ汝の婿養子なもの、少とも遠慮する事はありやしないよ、汝が又小くなつて、剛の云ふ通り何んでもハイ云つて聞いているんだから、こんな不始末も起るのさ、いざと云はゞ竈の下の灰までも自分の物だから持つて行くと云ふ見脈を見せて時々は嚇かしてやるが善いのよ」

岩そんな事は教へずとも、女の子の皆持つてる悪い癖だ、兎角世間て入婿の家内が旨く治つて行かないのは娘の方に不知不知、そんな高慢な氣振を見せるから起る事だ、構へてもそんな氣を出してはならん、剛のやうな豪い男を夫に持つてる果報には、少々の心配や氣苦勞は、まア所得税だと思つて納める覺悟が肝要さ、妻の一人や二人置いたからつて、お父さんはそれを別に何とも思つてはゐないのだが、唯舊の情婦を隠匿ふて置くといふのが少し氣懸りぢやて……」

安子少し處ぢやありませんよ眞實に……」

岩去それもこの前、剛に逢つた時には、決してそんな事はない、あれはもう東京には居ないのだから心配するには及ばない、自分がこんな心に悩ましているのは政事向の事だと云つて、いかにも偽はなさうに思はれてゐたが、三日も居續けして未だ歸らぬといふのは何んだか可笑しい話ぢやてな」

安子可笑いも何にも、良君、ちやんともう分つてるぢやありませんか、



良君は剛の辯口に云ひくるめられて了つてお居なされるのです、それにしてもその妾の圓つてある場處さへ突留めると、又何とか方法もありさうなもんですが、何うか其工夫はないものかねえ」

藤子あの、警視總監さへ抱込んでないのだと警察へても云つて調べて見られませうけれども、あの人が剛さんの手足になつて働いてるのでムいませうから、何うする事も出来ません……」

岩井しまア、汝と剛との間には小い坊主もある事だし、彼人が今日の地位を造るにつけても石澤家とは容易ならぬ關係があるのぢや、そんな無闇と、やさもき心配しなくても剛は賢い人だからその中目も醒めて來やう、時節を待つのが上策かも知れんな……守雄は今日は何うして連れて來なかつたか？」

藤子彼の子は學校でムいますの……けれどもねお父さん、貴方の仰やるやうに他の女なら、兎も角、前に馴染のあつた、深い仲の人なんてすもの、焼木杭に火は付き易いとやら申しますが、然う考へて見る日になり

ますと、剛さんは豪い方ではあるし、随分思切つた事をなさり兼ねない氣象だから、私を離縁して丁ひ、財産は自分の方へ取込んで置いて、好きな女と夫婦にならなさんものでもムいません」

安子尤ですよ……」

藤子それを思ふと私はもう心配で、真に夜の目も寝られませぬ、今朝なんか何うしても御飯が旨くなくて、喉を通らぬ程でムいますもの、之といふのも私が餘り苦勞性なのでムいませうけれども、剛さんに見捨てられて了つたら世間へ對しても顔がないし、私はもう何うしたら善がらうかと……家で獨り考へてると、寧ろ死んで了ひたいやうな氣がします……お父さん……お母さん、何とか善い思案はありますまいかねえ」

安子そんなに汝が心配してるのを聞くと、私はもう眞實に、遣る瀬がなくつて來ます、何の因果に剛なんかを婿にしたのだらうね、そんな豪い人に添はせて娘に瘦細るやうな心配をさせるより、あまり働はなくとも汝の好いた人と夫婦にして、仲よく暮させた方が汝の幸福でもあつた

し、私等も亦安心して、この様ないさぐさを聞かなくても済んだ事たつた  
ろうにね、お父さんが我を張つて、汝の思がつてた者をあんな事にして  
了つて……」

岩コヲ、愚痴を云ふな、今更そんな愚痴なんか云ふものではない、明日  
の事も知らぬ人間が十年先の事の分ろう筈はないのぢや、剛が今、少し  
位の心配をかけるからと云つて、そんな事は又取返の附く時節も来やう  
が、汝の最負なあの明なんか、とても全快の見込のない、肺病で苦しん  
てゐるのではないか、あの方を婿にしてゐたら、汝は又、剛を婿にしな  
かつたのを悔むだらうよ、何うせ世間の事は然う旨い工合に行くもんぢ  
やない、萬事成行に任せてゐいて、沙合を見て茲ぞと思ふ時ギと橋を  
立直して、流を上つて行くなり、横切るなりするのぢや、其時、力が及  
ばんけりや何うも仕方がない」  
安王だつて、あの時、明を婿にしてゐたら、明は決して肺病なんか出し  
やしませんよ、この娘もこんなに瘦せるやうな心配はしませんです」

阿王「お母さん、もうそんな事は仰つて下さいませ、何んだか私は胸が  
痛くなつて来ますもの」

岩太郎「汝あんまり心配して、病氣なんか出しては困るよ」

安王「眞實に藤子や、汝體を大切にしておいて病はないやうにしてくれよ、お  
父さんも私ももう段々と歳は老つて来るし、家督を譲る筈の兄息子は、  
ア、して汝、外國なんかで亡くなつて了つて、死顔さへ見られなかつた  
んだもの……依頼にするものは汝より外にありやしない、お父さんやお  
母さんが辛い思をして稼溜めたこの幾百萬のお金だつて、終には皆汝の  
物になるのぢやないか、それを汝が今、何う斯うといふ事があつては、  
何の爲めに辛棒して、金を拵へたのか分らなくなつて来るのだもの、眞  
實に汝、體を大切にしてくれよ」

岩私等の爲めには天にも地にも掛變のない汝だから、何うか氣分を少と  
呑氣に持つて、長生をしてくれ、兄のやうに天死が人間は一番損だ、  
何うか石へ嚙著いてよも善いから長生する覺悟で居てくれ」

「藤子、い……あ、亡くなりなすた兄さんは二十七で亡くなりましたのねえ、私もあの……私も今年は二十七で亡いますよ、何んが邸で一人ゐると、私は心淋びしいやうな気がしますの……死ぬなら死ぬて善いいます、こんな苦勞性に生れて来て、いろんな心配許してゐるより、寧ろ死んだ方が増かも知れませぬ……」

安子「そんな馬鹿な事を云つてくれるな」生きてゐやうと思つたら百年でも生きてゐられる、氣の弱い事を云つて親へ心配をかけてくれるな」  
 岩波「死んだら私等も死んで了ふ、親に長生がさせたりや汝も長生せにやならん、あまり心配し過ぎすと、まア、氣永く待つてゐれば、今に面白い日の目も拜まれるわ」

○下手より小田川明、朝子洋杖、洋服姿にて入来る。

「伯母さん、伯父さん、誠に何うも御無沙汰しました、……オヤ藤子さんも御機嫌善う」

安子「オヤ、明さんか、よくまアお來なすつたのねえ、幸藤子も來合せて

「おます、さア何卒此方へ……松や、松や椅子を一脚持つて来てくれ……」  
 明「何卒お構ひ下さらんで……實は上野まで散歩旁々、西洋畫會の油畫を見に参りまして、其歸りがけ、一寸と裏木戸が明いてゐましたからついでら、入つて見た様な次第で亡います、何うも大きに御無沙汰しました」

岩波「暫らく見えなかつた様だが、汝は近頃病氣は何うだの……血色は大分善いやうだが……」

明「難有う亡います、まア相不機……ぶら／＼してゐます」云ひつゝ咳く。

安子「汝は未だ年が若いから養生したら大丈夫治りますとも、まアあまり氣を焦らさずと、悠々保養するが第一ですよ」

明「難有う亡います……何、こんな病氣に捕まつちやア何うせもう助からぬに極まつてゐます、一度死んだら二度死ぬる氣遣はありませんから死ぬなら寧ろ早く死んだ方が結局氣樂で亡いますよ……」  
 安子「汝まアそんな亂暴な事を云つてはいけません、汝の様な若い人はこ

れから先に樂があるんだから十分に保養して體を健康にする工夫をせん  
 けりやなりませんよ」

明「樂みなんかありますものか、そんな處はもうずつと普通過したのでム  
 いますもの、もうあまり長く生きてるのも娑婆ふさげだと思ひまして自  
 分て求めてこんな病氣にもなつたやうなもので、私の靈魂は私の死體  
 を括り附けられて、重たさうに浮世の大道を引ずつて歩いてるのですな」

岩「汝の様な若い者が、何時迄もそんな醉興な言を云つて、瓢箪のお化が  
 何ぞのやうにぶら／＼暮して居るものではない、病氣なら病氣の様に十分  
 に手當をして早く善くなる工夫をするが善かろうし、勉強する氣なら又  
 其様に、體に障らぬやう時を極めて勉強するとか、物事は極を附けない  
 といかん、花や酒許りて人間の務は濟むものではないぞ」

明「伯父さん、……ハイ、私は瓢箪のお化かも知れませんが、ぶら／＼して  
 暮しては居ますが、私も始めから好き好んでこんなに身を持崩したので  
 はありませんよ、それ程私の事を思つて、下さる御信切があるのなら、

何故私にこんな真似をするやうに仕向けなされたのです」

岩「サ、貴様は其様な意久地なしを云つてるのぢやないか、自分の仕出か  
 した事を他人に塗りつけて、自分の不身持は他人の所爲だと、身を怨ま  
 いて人を怨むやうな、貴様はそんな骨のない男だと、私は始めから見  
 取つたので、そんなものに大切の娘の一生涯を委託されたものぢやアな  
 いから、此方の思ふ通り計らつたのが何んで批難の打ち處があるか」

明「貴方は伯父甥の義理も情も知らない方です」

岩「今更貴様はそんな愚痴を云つてるのか、何歳までも子供ぢやアあるま  
 いし」

安野「まア、良君も、明さんも出逢つたら、犬と猿とのやうに何時でも  
 がみ／＼云合をなさる、もう大抵にして癡止して下さい、明さんは病人な  
 んぢやありませんか、いろんな事を云つて心配させては又病氣に障りま  
 す」

岩「己が知つた事かい」

「安、あのあれぢやアありませんか、鎌倉の別荘に出養生してる私の妹も、ア、して足も腰も立たない様な病氣ではありますし、此の子の事につけても一通ならぬ心配をして居りますのですもの、自分の娘が可愛ければ、少しは私の妹の心にもなつて遣つて見たが善ムいす、明さん、もう何んにも云はないが善いよ、先般は雪さんが、それはく、珍らしい大輪の大さう奇麗な薔薇を持って来て、藤子に見せてやり度いつて、御信切にねえ、私等と一緒に彼方へ持つて行つてくれたんだよ……明さん、汝は近頃、鎌倉へは行かないのかい」

「明、ハイ、是から行つて来やうかと思ひます……あの薔薇の種は西洋の友人の處から送つて来たので、私が鎌倉の方へ裁えて置きましたのです、藤子さんは見てくれましたのですか」

藤子「ハイ、左様ですつてね……難有うムいました」

○ 執事出て来り

「申し上げます、唯今、日本橋の銀行の方から電話が掛りまして、大旦那

様の御都合を伺ふて居りますが、如何申してやりませうか」

岩太郎「ア、左様か……何か重役の臨時會議があるとか云つて、私にも是非来てくれいと云ふ話が兩三日前あつたのだから、それでは其事だろ、出掛るとせうよ、……まア明さんもゆつくりして出な、今に歸つて来るから」

安子「ではあの召物を……」

岩太郎「イヤ、よし、よし、それは女どもが心得えてゐるから、汝はまア此所に居れ、此所に居て明さんと三人で話をして居れ」眼ませて知らせて、岩太郎立去る

○

安子「何時でも七むづかしい事許り云つて明さんを困らすのだから、明さんも、叱言の御馳走にはあまり感心しないでせうから、自然と足が遠くになりますのねえ、あれはあの様な性分だからまア堪へておくれよ、久しぶりだから何か御馳走したいが、葡萄酒はいけたのねえ、明さんは、」

明「否、何卒、もうお構ひ下さつてはいけません」

安子「他人行儀は要りませんよ、此處の木蔭が涼しいから、寧ろ此處へ卓を運びせて、涼みながらお話しませうねえ」鈴を鳴らして女中に命ずる、女中、卓を運び、葡萄酒、林檎など持来る。

安子「さア、藤さんも一杯……汝、然う考へ込んで許居てはいけませんよ、お酒でも飲んで少と物事を忘れたが善い、明さんとも他人ではあるまいしお話したら又氣が紛れますよ」

藤子「お母さん……こんなに澤山お注ぎなすつては困りますよ、私はそんなにいけないうですもの」

安子「何に、一杯や二杯……これは毒にはなりはしないから、少し位酔つたつて構やアしない、胸が開けて、心配事がなくなつて善い」

明「心配事ですつて……何かそんな心配事が藤さんに出來ましたのですか、ね、伯母さん」

安子「この娘は汝、この頃は眞實に可愛さうでならないんだよ」

藤子「お母さん……そんな事を云はなくても善ムんす」

安子「明さんにだから云つても善いとも、他人ぢやあるまいし……これと云ふも皆、お父さんが頑固で、あんな何處の馬の骨やら知れぬ者を、この娘の亭主にさせたりなんかなさつたから起つた事さ、汝、あの剛が、此頃は邸を明けてもう三日も歸つて來ないんださうだよ」

明「エ、剛さんが……そんな浮氣を始めたのですか、何處かへ妾でも置つて置く」と云つたやうな……」

安子「妾ならそりやアまア男の働さといふ事もあるから我慢の出來ない事もあるまいけれども、あの人の舊の情婦だといふんだもの、汝、あんなり圖々しかろうぢやないか、人の財産を勝手に使つて、大臣の位に迄上つて置いて、自分が善い子になつたと思つて、もう汝には用事がないから何うでもして見ると云はぬ許の、仕打なんだもの、この娘の腹の立つのも道理だ、考へて見ると私はもうもう肝癪が起つて……」

明「エ……それは何うも……それは何うも不埒極つた事をするんですなア」

安子「不埒とも不届とも、眞實にもう、私は此の子が可愛さうて……汝、三日三夜も不寝不食で、待つてたといふのに、それにまだ歸つて来ないのださうだよ、この娘があんまり溫和過ぎるので、馬鹿にしてかゝつてゐるのだから、此方でも最些と確かりしてなくては、今に何んな目に逢ふか……あんな者を婿にしたのが私は今更残念でならないんだよ」

明「そんな不埒な奴でしたか……何うもあれ丈此家の御恩になつて、藤子さんの庇蔭で今日の地位を得て置きながら、自分が一本立になつたからと思つて、人もあらうに舊の情婦なんか圍つて置いて、三日も家を明けるなんて……」

安子「眞實にあんまりだわねえ」

明「實に言語同断の所置です、之と云ふも日本ではあんまり女が男に依頼し過ぎてゐるからです、男の庇蔭で生命を繋いでゐる者ゝやうに、婦女子が皆然う思つてゐるもんですから、それで男は自分で好きな我儘勝手働いて女を凌辱するのです、藤子さんなんかは……（咳入りつ）……此方

の庇蔭で男に地位を得させてやつたのだから、そんなに卑屈に、小くなつて服従主義を守つてゐなくても善いいますとも……藤子さんなんかは率先して妻たる者の権利を主張してやるが當前です」酒と、熱心とに、顔面紅となる。

安子「眞實に汝も男の事許心配してゐないで、男に心配させてやる様に、些と仕向たが善い、何んの、落度は向にあるのだから、氣に入らなかつたら向で勝手に出て行くが善いんだもの、あの時、明さんと夫婦にして居たら今日、こんな心配事はありますまいと、私はつくづく然う思ひます、婿が大臣になつたつて、お父さんは大自慢だが、親は世間へ自慢をして歩いてゐる、娘は家で泣いてゐるやうなら、大臣さんも天神さんも私には少とも難有くも嬉しくもない、それよりは夫婦仲善く暮らしてゐて、親が見ても羨やましいやうなのが、何より一番幸福だと思ふよ」

藤子「呻を拭きながら」お母さん、もうそんな事は云つて下さいませぬ、私は愈悲しうなつて……何んだか心細くて仕様がありませんのですもの」

安子何にも汝に心配させ度くはない、皆、汝が可愛さうだからお母さんは云つてるのだよ、さアも一杯お飲みよ、林檎も食べたが善い」

藤子もう私は、頭が熱くなつて来ましたから……」

明私も大分好い氣持になりました、酔つてる中は苦勞も心配も忘れて了ふから何より極樂です……ア、藤子さん、藤子さんが華族女學校を卒業の年、夏てしたけね、伯母さんと三人、銚子へ行つて海水浴をやつた事があるぢやありませんか、あの時が私は一番樂しかつたですよ、藤子さんが葡萄酒に酔つて苦しいからつて云ふので、私が手を引いて上げて一緒に海岸を散歩したてすな」

安子そんな事があつたけな」

明あの時犬吠崎の燈臺へも上つたぢやありませんか、下は太平洋で大きな浪が轉がつてるし、何千里の向から吹いて来る風が浴衣の袖を吹通して……ア、あの時が一番愉快でしたよ」

安子ア、あの時は眞實に面白かつたけねえ、この娘は毎日々々潮を浴

びるもんだから眞黒になつて、漁師の娘と間違えられたりなんか、ホ、ホ、あの時は兄の方も健康であつたんだし、眞實に面白かつたけどもね……」

藤子あの頃は些とも苦勞も心配も知りませんでしたもの、も一度あの様になつて見度うていますわ」

明私もある時の様に、も一度なつて見度いと思ふのです」

藤子女は何時までも娘で居たら心配事や、苦勞なんか知りませぬのでせうけれどもね……樂しい時は夢のやうに早く濟んで了ひますし、苦勞はこれから先、何時まで續くのかと思ふと、私は心配でくになりませぬわ」

明否、死んで了つたら事終れりです、樂があればこそ生きてゐても生甲斐がありますけれど、苦痛許りなら人間は死んだ方が遙か優つてゐるのでね、私なんか其方の組ですけれども、矢つ張憶病者だから自殺する事も出来ないし、さればと云つて樂くもないものを無理に樂しがつてゐる事も出来ない譯だし、困つたものです」

藤子あの頃は些とも苦勞も心配も知りませぬのでしたもので、も一度あの様になつて見度うていますわ」

明私もある時の様に、も一度なつて見度いと思ふのです」

藤子女は何時までも娘で居たら心配事や、苦勞なんか知りませぬのでせうけれどもね……樂しい時は夢のやうに早く濟んで了ひますし、苦勞はこれから先、何時まで續くのかと思ふと、私は心配でくになりませぬわ」

明否、死んで了つたら事終れりです、樂があればこそ生きてゐても生甲斐がありますけれど、苦痛許りなら人間は死んだ方が遙か優つてゐるのでね、私なんか其方の組ですけれども、矢つ張憶病者だから自殺する事も出来ないし、さればと云つて樂くもないものを無理に樂しがつてゐる事も出来ない譯だし、困つたものです」



藤子「明さん……何卒堪へて下さいよ」と手巾で眸を拭く。

明「否……これも私の意久地なしからで、伯父さんの仰やるやうに、人を怨むのは間違つてるのでせう」と、聲曇る。

安子「……汝等二人をあの時夫婦にしてやつたらこんな事にはなるまいもの……エ、剛の奴め、今頃何處で巫山けた真似をしてゐるのやら、其方でそんな圖々しい事をやるのなら、此方でも面當をしてやりたいが、何とか工夫はないものか知ら」

明「私は何うもとんだ長坐をしました、汽車の都合もありますから、それでは私はこれで失禮します」

藤子「もうあの、お立なされるの……最少し御ゆつくりなさつたつて善いてせう」

安子「まア、も少し話して行つたが善い、鎌倉行の汽車は幾度も出るのだから」

明「少し都合もありますから失禮します」

藤子「何んだかお名残惜いぢやアありませんか……ア、お母さん、私も鎌倉まで行つて見ませうか知ら、これから邸へ歸つても又心配許してゐねばなりませんし、明さんと御一緒に叔母様の御見舞に行つたからつて少とも人に疑はれる筈はありませぬからねえ……少しは私の氣晴にもなりませうし、剛さんが私の事を心配しますか何うか、それを一つ、試てやり度うムいますから、」

明「イヤ、それは何んだか穩當でないやうですなア」

安子「否々、それは藤子、善うこそ思立つた、従兄妹同士だもの、明さんも何にもそんな他人行儀は要つた事ぢやない、些と剛への面當てに、向の氣を揉ませてやるのが後々の爲にもなりませうよ」

明「左様云へばまア左様ですな……それでは久し振に御一緒に歩くのですかね……」

藤子「あの……もしや人が疑ぐつては何んですからもう守雄も學校から歸つてゐませうし、あの子と呼んで、一緒に連れて参りませう」

「明、そんな事をしなくても大丈夫です」  
安王、そしたらあの子も喜びませう、ぢや一つ準備をするが善い」  
爾王、左様ませうね、何んだか私は逆上て來ましたやうなの、面が赤う  
ムいませう」  
「明い、色ですな」皆々立つ

(其二) 鎌倉海岸の場

守雄、俄鬼大將、漁童等を驅り集め、俄鬼軍一小隊繰り出す。  
守雄、進め、オイ、ブツブツブツブツ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、喇叭の聲、  
俄鬼軍、四百餘州を擧る、十萬餘騎の敵、开は何蒙古勢、何んぞ恐れん、我  
に鎌倉男子あり、忠勇武斷の名一括して世に示す……………」  
守、全隊ホル……………右へ傲へ……………二隊に分れて戦争事をするのだぜ、サア僕  
が大山大將……………この大きな子がちやんく坊主の李鴻章のへこたれ……………」

「ちやんく、坊主は悪だ、己は日本だ」  
子供、己も日本だ」「己も日本が善いだよ」  
守、皆そんな事を云つては戦争が出来ないから云事を聞かないと打切つて  
了ふ」 劍を抜く、

子供、そんな鐵葉なんかで製へた劍で切れるもんか」  
守、失敬な事を云ふな、僕のお父さんは司法大臣だから汝等を皆監獄へ打  
込んでやるぞ、僕の云事を聞かないと、監獄へ入れてやるぞ……………」  
子供、へい……………ちやんく、坊主になります」  
守、それでは僕の云ふ通りに二隊に分れるんだ……………此處では面白くないか  
ら、ちやんく、坊主はその舟へ乗れ、その舟が支那の鎮遠號、僕等は日  
本軍だから此方の舟に乗るんだ、これは帝國軍艦富士艦だぜ、此方は一  
萬二千噸だから其方よりは大きいのだ、此處で兩方から砂を打ち合つ  
て、大砲の彈丸といふ事にするんだぜ、さアちやんちやん坊主は早く其  
方の船へ乗れ、日本は此方だ」

守「打て——、オイ………」  
子供「打て——、オイ………」  
守「僕は伊東海軍中將だ、打て——オイ………この網が敵の水雷艇を網ぐのだ」と引張り廻す。

○  
年老つた漁夫「駈け出で来り」「コレ〜〜廢めろ〜〜、悪戯するにも法圖のある、砂を舟へ撒きかけたり加之に網を破かれたりした日にや明日の日の稼業が出来なくなる、仕様のない餓鬼共だ」  
守「何んだ己は餓鬼ではない、司法大臣の子だぞ、失敬云ふとお父さんに云告げて監獄へ打込んでやる」  
漁夫「司法大臣の子がそんな悪戯すると此方から監獄へ打込んでやる」

守「何んだ、失敬な、禿爺め、斬つてやるぞ」  
漁夫「ア斬るなら斬つて見ろ」  
守「ア来い、この老爺め」

漁夫つと進寄り、結局守雄を肩車に乗せる「さア、大將を生捕つた」  
守雄「禿頭を叩きつ摩りつ」「この禿老爺め……ァ面白いわ〜、さア進め、全隊進め」  
カツアツアツ、ハハハハハハハ、一同退散

○雪子と藤子夫人散步の體

雪子「守雄さんは今其處で大勢と一緒に遊んでゐたかと思へば、もう何處かへ行つて了つてよ、眞實に活潑なのねえ」  
藤子「あの子は随分亂暴な方ですけれども子供の時が何を云つても一番罪がなくて善いいますよ、眞實に人間は何時迄も子供で居たら善いと思ひますわ」

雪子「姉さんはあんな事を仰つて、可笑いのねえ、何うしたつて歳を取らないでは濟まないものですし、子供の時は又子供の時の幸福もありますけれど、大人になつたら又大人に相應した幸福もあるものだつて、學校の倫理の先生がよく然う云ひなすつてよ」  
藤子「雪さんなんかはもう學校を出たら直に何方かと結婚をなさるのでせ

うし、又その結婚を幸福の一つに数へて居るのでせうけれども、何う  
ですかねえ……除つ程考へ物だわ」

雪子「あら、姉さん、あんな事を仰やつて、……結婚なんて……そんな事  
は些とも定つてはあませんのですもの」

雪子「けれども貴方は何うせ結婚なさるのでせう、結婚しなくては済みま  
せんのですものね、それにつけても何んな婿さんが善いでせう、それが  
考物だわ、雪さんは一體何んな人が理想なの？」

雪子「ホ、ハ、そんな事耻かしくて云へないわ、」

雪子「些とも耻かしい事はないわ、一生の大事だから誰か親身の者に打明  
けて相談もして見ないと後で大事な後悔する事が出来て来ますのよ、親  
の命令だからと云つて、自分の心には假令進まない事があつても御無理  
御尤に従うて置いて、兎に角結婚をしてつてから後で夫と仲が善くな  
かつたりして……まア眞の賢いすけどもね一生不幸に暮さなければなら  
んやうな事があると眞實に詰まりませんわ、人間は二度と再び、生れて

は来られないのですもの、結婚なんかは始めから善く自分の思ふ通りを  
親に打明けて云つて了ふが善いのです、些とも耻かしがる事はありませ  
んよ」

雪子「そりやア然うてムいますのね……私は別に理想の何んのでありませ  
んけれども唯私の器量に相應した夫がありましたらそれで満足しますわ」

雪子「雪子さん……貴方は眞實に善いお心掛けてムいますわねえ、眞實にそ  
れが理想の夫とでもいふのでせうよ、私なんかあんな豪い人を……兎に  
角大臣にでもなるやうな人を夫にして、いろんな苦勞許してゐますの、  
性分が性分なのですから他人から見れば可笑しいやうな事かも知れませ  
んが、女ですもの、夫が家を明けて歸つて来なかつたりすると心配せず  
には居られませんわ、元來私が器量不相應な夫を持つたからその罰かも  
知れませんよねえ……」

雪子「そんな事はありませんわ、姉さんはあんまり心配し過ぎなさるから  
いけませんわ、あんな人物を夫になさつたのは矢張姉さんの身に備つた

徳があるからでせう、少とも不相應な事はありやアしないわ」  
藤子「私の身に徳が備つてゐるつて……雪さん、そんな事を申談にも云つて  
下さいますな、私は耻づかしくなりますもの」

○明出て来る

明「大分涼しくなりましたね、江の島の邊がよく見えて来た、ア、夕陽が  
波に映つて、宛て銀の鯉が跳り廻つてゐるやうだ、……富士もさぼろに  
見えてゐるし、ア、好い景色だ」

藤子「眞實に好い景色でゐますのねえ、何んだか繪のやうでゐます事  
……………」

雪子「兄さん、貴方この前此處で寫生をなすつたでせう、あれは善く出来  
てたわ、姉さんに御目に覚けなすつたの」

明「あんな者は人に見せるやうな者ではない、閑人の戯書だ」

藤子「それは是非見せて戴き度いものでゐますねえ」

明「何に、詰まらんです、何うせ人間界から捨てられた私ですもの、人間

に見せられるやうな眞似が何一つ出来る筈はありません、ア、雪さん、  
お母さんが今汝を呼んでゐらしたよ」と咳く、

雪子「アラ然う……何んだか風が涼し過る様だから兄さんはお寒くはあり  
ませんの、羽織でも持つて参りませうか」

明「否、善いから早く行け」

雪子「それでは姉さん、一寸と失禮しますよ」

藤子「早く歸つて入らつしやい、ね、早く……………」

明「藤さん、まアこの舟端へでも腰を掛けて話さうでありませんか」

藤子「眞實に好い景色でゐます事ねえ……オ、涼しい」

明「藤さん、藤子さん、まア此處へお掛けなさい、肺病が傳染りはしませ  
んから」

藤子「随分、貴方も皮肉を仰やるのね……御病氣は眞實に如何でゐます  
か」

「もう三期ですからとても長持はしませんね、唯氣許馬鹿に強くなつて斯うして元氣よげに見えてゐるのです(咳)併しまだ生でる中に、貴方と一緒に、こんな處で斯う差向で、談をするやうな事があるうとは意外でしたよ」

藤子「何卒、貴方も御養生なさつて、お健康におななすつて下さい、お願いですから」

「私は健康になつたら藤さんと夫婦にでもなられるといふのなら、そりやア無理からでも健康になりませうが、ア、そんな事も今更返らぬ愚痴ですし……見て下さい、手はもうこんな細く瘦せて了ひました、この頃は夜もあち／＼寝た事はありません、枕に着くと何んとなく物に襲はれてもするやうな氣がして身慄が附いて來ます、一日生延れば、つまり一日丈煩悶を引延して行くに過ぎないのですから私は早く死ぬる日の近づいて來るのを歓迎するです(咳)……あの、夕陽の様なもんですねえ、私の境涯は恰當あの、今西の方へ落ちかゝつてる夕陽の様なもんです、

段々と暗い闇の中へもう沈んで行く一方、愚痴かも知れませんが、あんなに女々しいかも知れませんが、もうこの明の前途には死ぬといふ事の外には何等の希望もありません、死といふ事が私の心の煩悶を絶つて呉れる唯一の醫師です、私はもう少とも體なんか構つちや居ません……」咳

藤子「眞實に、貴方には濟みませんのねえ……私があの時、あんなに氣が弱くなかつたら、こんな事にはなりませんでしたろうにね、剛さんは未來の大臣だ大臣だつて、世間の人の評判やら、父が聒ましく然う云つて聞かすものですから、つい私も半分は迷はされて了つたのでムいませう、今更自分で自分が分りませんけれども、あの時の事を思ふと眞實に辛うムいませう……」

「私を可愛さうだと位思つて下さるのですか、藤子さん、……藤子さん、貴方は私の心を少しは酌み分けてくれるのですか」  
藤子「ハイ、眞實に貴方には濟みませんでしたねえ」

明「藤さんは私の事を全然忘れて了つたのではなかつたのねえ……ぢやア少しは私の境遇に同情を寄せてゐてくれるのですか」

藤子「ハイ……御氣の毒でなりません」

明「御氣の毒で……ついそれ丈ですか、私が藤さんを思つてゐる愛情は、あの剛なんかと比較物ではないといふ事は貴方はよく分つてゐるのですか、剛が今そんなに、貴方に對して不埒を働いてゐるのを見るにつけて、私がこれまで何れ丈貴方を眞心から思つてゐたかといふ事が、ち分りになつたのですか、藤さん、それが分つたのですか」

藤子「ハイ……眞實に、貴方には濟みません」  
明「私の心が貴方には分つたのですか、私の愛情が（咳）藤さん、分つたのですか、私はもうとても長く生てはゐられませんが、せめてあの夕陽の西の山の端に沈む時、花々しい夕榮のするやうに、貴方が私を愛してゐる……昔の儘の藤さんになつて私を愛してゐるといふ其一言を聽いて死際の慰めと仕度うムいます……」

藤子「眞實に濟みません」  
明「藤さん、唯一言で善いから聽かせて下さい、ハイ、それはあの美しい夕榮よりも私に取つて花やかな吊ひです藤さん、慘酷かも知れませんが、剛君がこの度の不埒を寧ろ私に取つては幸福だと感じたのですよ、實際白状しますと剛君の薄情が貴方に知られたのを私は喜んでゐるのです、ハイそんなにまで私の貴方を思ふ愛情は、此の心に取着いて何うしても離れません、ハイ、蛇のやうに愛情は執念深うムいますよ（咳）藤子さん藤さん……貴方はこれでも私を愛してくれないのですか、愛してゐると一言云つてくれる事が出来ないのですか」

藤子「私はもう眞實に……貴方には申譯がありませんのねえ」咽び入つてゐる

明「そんな事は何うでも善いです、昔の儘の藤さんになつて、私を愛してゐると唯つた一言云つては下さいませんか」と詰寄る、  
藤子「……明さん……貴方の御心を聞きましては眞實にもう私は何と云つ

て御詫して善いやら、こんな詰らない者をそんなにまで思つて、下さるのかと思ふと有難いとも何んとも申上様はありませんが……私ももう今日では剛の妻でムいますし、子まである仲ですもの、今更何んとも取返が附かないぢやアありませんか」

明「そんな事はもう云はなくても分つてゐます……唯一言……」(咳く)

藤「あの今日叔母様の御見舞に、わざと貴方と御一緒に來ましたのも、女の浅果敢な猿智恵かは知りませんが、一つは剛の浮氣を何うかして止さす手段にはなるまいかと、それが一心でムいますもの、それを何う斯ふ云ふ事があつては両親にも濟ませず、剛に對しても、私の方が悪くなつて了ひますから……明さん、眞實に濟みませんけれどもねえ、」涙を拭いてゐる

明「それはもう聞くには及びません、何にも私は貴方を姦通罪に落さうとはしてゐませんよ、唯貴方が心を愛してゐるのなら、然う云つて下さいと云つたのに過ぎないですが……」

藤「眞實に、貴方に對しては濟みませんけれども……」眸を押へてゐる  
明「その言葉を聞いては貴方は矢張昔の藤さんぢやアありません、エ、貴方は明を殺しました、一度で足らず、二度も三度も殺しました、この怨みは屹度覺えて居なさいよ」と、叩きも蒐らんず見脈、藤子は逃身に構へ

藤「濟みませんけれども私の身になつても考へて見て下さいまし眞實に辛うムいますわ……明さんそんなに私許に怨みなさる事はないぢやアありませんか」

明「エ、薄情者」と胸先を掴む

藤「貴方、何をなさるんですよ」

明「此の嘘ツ吐き……」俄かに激しく咳き込んで、明、砂上へ倒れる、藤子驚いて介抱、

藤「貴方ア何うなさつたのでムいますよ、明さん、確かりして下さいまし、明さん……」



○下手より益田大藏大臣稍酔心地藝者三八、雛妓玉江を引連れて散歩

三八「ちよいと、好い景色ぢやアありませんかねえ、御前ぢやアなくつて大藏大臣閣下さま」

益田「此處で大きな聲で大臣なんか云ふては困る困る、お微行ぢやく……」

玉江「眞實によくつてよ、あんなに眞紅に夕照がして、宛て書のやうだわ」

益田「この妓も畫のやうだわ、眞實に可愛い口元をしてるのう」

三八「あら玉江さん、汝を諧弄つて、憎らしいから打つてお上げよ」

益田「大さう汝恪くぢやアないか、道理で雲までが眞赤に焼けてるんだなハ、ハ、焼くといへばあれ彼處に若い男女の二人連れ、場處もあるうに砂の上で轉がり合つてるぢやアないか、怪しからんな」

玉江「どれ、何處に、眞實にまア……肩を揉むか何うかしてるぢやアありませんか、エヘン……」

三八「エヘン……エヘン……」

益田「兎に角若い者はあれだから困るて」

三八「お老年は困りませんのねえ」

益田「己はまだ年老の部に入つてゐないよ」

三八「オヤ、左様でムいましたかねえ、まだ廿歳で入つしやるから」

益田「ア、己は何時までも廿歳の氣で居るのだ、鬼頭君ではないが、國家の人材が然う早く老ひ込んで困るからの」

○  
益田「オヤ、誰かと思つたら、鬼頭君の夫人さんではありませんか」

藤子「あらまア、貴方は益田様……何うしてまア……あの、お一人て入つしやいますか」と少し周章してゐる

益田「イヤ、少しその、保養がてら……斯う云ふ連中を引連れて散歩してゐるです、ヤア、小田川君ですか、暫らく」

明「ヤ、……益田様ですか……」

益田「まあ互に、斯ういふ體裁では長く話もならん、失禮するよ」と頭を掻き、匆々に皆々立去る。

○ 後に二人、顔を見合せて

藤子「何んだか、益田さんは私等を變に思つて入らしつた様なのねえ」と思案顔。

明「傍からでも然う見られたらせめて私には慰籍です」

藤子「エ、………とんでもない」

○ 下手より「四百餘州を擧る………あらお母さん此處にゐたのと守雄駆け寄つて取纏る、餓鬼聯隊一齊に軍歌

(幕)

第六幕

(其一)鬼頭邸葛藤の場

○ 小間使花、其處等を取形附けながら

「眞實に奥さんは何うなすつたのだろう、今日の新聞なんかにあんな悪口を云はれて、まだ御存じないのかも知れないが、今夜も歸つてらつしやらないやうだと、何んだか少と怪しいわ………」と卓上の新聞を讀み始めてゐる。

○ 書生川村、密と出て來り袖を曳ひて

「花さん………花子さん………オイ花子夫人………」

花子「私、吃驚しましたよ、まア川村さん、突如に人の袖を引張たりなんか、申談なさると奥様に云告げて上げますよ」

川村「これは又手酷しい振られ様だな、イヤ又その柳眉を逆立て、凛とした眼光で男を睨み殺さうといふ處へ僕ぞつこん惚れ込んで了つたのです、君が一夜の情には僕が百歳の生命も敢て惜む處にあらずだ、大抵にしてもう焦らさずと色よい返事を聞かせてくれ給へ、今夜も親指小指は留守らしいから、君と僕と妥協さへ成立したら早速秘密條約を交換する事が

出来る譯ぢやないか、ね、僕に花子夫人と呼ぶ事を許してくれ給へ」  
花子「知りませんよ、眞實に何んてうるさい人だろう、奥さんに云掛けて  
上げますよ」

川村「さア、其奥さんが今日の新聞の一件、司法大臣令夫人の姦通なんか  
と二號活字の標題で書き立てられてる始末ぢやアないか、どれ見せ給へ、  
まア一寸と見せ給へ、……エ、と司法大臣令夫人の姦通……車力の前引  
後押しして茲には百年の契を樂むもあれば、彼處には金殿玉樓の上、醜聲  
世にもるゝこそうたてけれ、今や政治界に天狗の鼻の己一人と高くとま  
つて、羽圍扇の一煽ぎに飛ぶ鳥も落すと自惚たる鬼頭司法大臣の御臺所  
藤子の方と申上ぐる、名丈何うやら殊勝げに聞ゆれども其實は家附の我  
儘娘、持參金を鼻にかけ、貧乏辯護士の成上りもの、小棟三合持たぬ大  
臣の亭主野郎を尻の下に敷き通し……イヤ、何うもこんな始めから悪意  
を以つて満されてる文字の行列には驚くね、……兎に角、あの小田川男  
爵といふのが、奥さんの情人だつたといふ事だし、日頃めつたに外出な

んかなさつた事もないお人が、大臣閣下のお留守に乘じて、泊まり込み  
とは聊か怪しかる譯ならざるにもあらずだね、反對黨の新聞でも此奴な  
んか最も有力な奴だから至て事實無根な事は書かない、實際、又奥さん  
が泊り込んだのは争ふべからざる事實だからね」

花子「眞實に早く歸つてらつしやれば善いに……」  
川村「イヤ、僕は寧ろ歸つてらつしやらざるを希望するね、花子さん……  
花子夫人、主が主なら家來も家來だ、殊に我々のは決して姦通なんか云  
ふ法律上の制裁さへ受けねばならないやうなのは自ら譯が違つてる、  
神聖な戀愛なんだものね」

花子「もう知りませんよ、眞實にこの人はいけすかない助平野郎だよ」  
川村「何んだ失敬な、貴様はそんなに乃公を馬鹿にしてるのか、……よし、  
この上は腕力に訴へて制裁を加へてやるぞ」  
花子「貴方をなざるんです、アレ——、誰か來て……」

○守雄、手巾の包を提げて駆け入る

守「何をしてるんだい、川村、ヤア、女子なんかを虐めてらア、可笑いなア」

川村「周章で「ヤ、お歸りてしまいましたか……これは何うも……」

花王「川村さん大抵にならつしやいよ、坊ちやま、お歸り、奥様もお歸り遊ばしましたか」

○藤子夫人入来る、

花王「オヤ、お歸り遊ばせ、少とも存じませんで、ついお出迎もしませんで、誠に相済みません……」

藤子「川村は……」

川村「ハイ……お歸り遊ばせ、つい一寸と……その新聞を見に来まして……」

藤子「何か、新聞に珍らしい事でも、出てゐたのか……」

川村「イヤ……その……なきにしもあらずですが、つい……何んてムいませ、何うも失禮致しました」

守「今、川村がね、花を虐めてたの、男の癖に、女なんかを虐めるんだもの、馬鹿だねえ」

川村「イヤその、全く、……何んてムいまして……」

藤子「何んでもいゝから汝は留守に私の居間なんかへ入つて来る事は成りませんよ、汝は玄關で番をしてたら自分の役目は済む筈です……主人の留守に花も男なんかと申談云合つて、はいけません、一家の取締が附かなくなるど皆私の面目にかゝつて来る事だからね……」

花王「ハイ……私は決して何んてムいますけれども川村さんが附けつ廻しつしまして……」

川村「ど、とんでもない、善い加減な事を云ふな」

藤子「もうそんな事は今聞かないでも善いから川村は彼方へ行つてお出て……」

川村「ハイ……僕は決してそんな覺はありませんから何卒……ハイ」狐鼠々々逃げ行く

藤子花、主人の留守なんかには汝も少と氣を付けてくれないといけな  
よ……あの、殿様はまだ歸つて入らつしやらないのかねえ……」  
芭「ハイ……あの、今朝一寸とお歸り遊ばして、それから又直と、お出掛  
遊ばしましたのでムいます」

藤子「何處へ行くとも仰やらないの？……私の事を何んとかお聴きなす  
つて入らしたるうね」

芭「ハイ、あの……」

藤子「昨夜歸る筈なんだつたけれども、叔母さんが何うしても歸さない  
仰やるもんだから病人の氣に逆つてはと思つてつい泊り込んで了ひ、今  
朝もいろい話をしている中、あの大雨なんだろう、そつちこつちついで遅  
くなつて、とう／＼こんな日の暮方になつて漸つと歸つて来たのさ、あ  
んまり久し振だつたもんだから、叔母さんが懐しがつて、お離しなさ  
らないんだものね、つい一寸と行つて来る氣だつたけれども、行つて見る  
と然うもならないものさねえ、然して、殿様は私の事を何んと云つてお

聞きなすつたつて？」

芭「あの、何時頃お出かけなさつたのかと、お問ひ遊ばしましたのでムい  
ます」

藤子「それ限りなの……何んとか外にお聴き遊ばしたのだろう」

芭「唯それ丈なのでムいます、外には何にも仰らないで又お出掛なさつた  
のでムいます、あの東郷大臣様が、今朝程とう／＼お亡り遊ばしたのだ  
さうにムいますから、大方その方へ詰めてお來なさるのだろうと存じま  
す」

藤子「東郷さんが今朝程……それぢやア眞實に其方へ行つてお居なす  
つたのか知ら……」

守雄「東郷の叔父さんが死んぢやつたつて？……それぢやア海軍大臣が無  
くなつたのねえ」

藤子「あの、そんなにお悪るかつたのかねえ……四五日前の新聞には一時  
快方に赴いたとか書てあつたやうに慥か覺えてゐるがそれが愈々お悪く

なる前表だつたのかも知れないね……眞實にそんなに早く亡くなりな  
ざるやうな事があらうとは思つてゐなかつたのだが……」

「眞實にも氣の毒でムいます」  
藤子「今度は誰が海軍大臣におんなさるのか知ら……殿様も心配して入  
らしつたが……」

守雄「お母さん……僕が海軍大臣になろうか、海軍は善いなア、こんなに  
澤山勳章を着けて、東郷の叔父さんが何時か僕の所へやつて来たけ」と、  
手巾包の中の貝殻を胸へ附けながら威張つて歩いて「東郷の叔父さんが  
僕にも海軍へ出給へと云つてたから、お父さんが僕を海軍大臣にしてく  
れないかねえ」

藤子「お父さんに然う云つて御覽……けれども誰やらの様に雷さんが怖  
くては、大砲の音なんかする處へ出て行かれないぢやないかねホ、」  
守「何に、雷なんか怖いものか……大砲の音は僕は大好きだ」

藤「先般の雷の鳴つた時耳を潰して、眞蒼になつて坐敷の隅つこへ逃げ込

んだのは誰？」

守「あの時はお腹が痛かつたんだもの……雷なんか些とも怖くも何んとも  
ありやアしないよ」

「では坊ちやんは雷が大好きで入らつしやいますのね、今度鳴りました  
ら坊つちやんが遊ばしてゐらつしやる時でも起し申しませうか」  
守「そんな事をしなくつたつて善いよ、僕は大好きではないのだから……  
大砲の音なら好きだけれども」

花「ホ、坊ちやんは大砲の音が好きでムいますか、花は午砲を聞いて  
ても吃驚しますわ、坊ちやんは眞實にも豪うムいますのねえ」

守「ウム豪かろう、角力取つたつて川村なんか直に轉げつちまふんだもの、  
今度、汝を虐めたら僕の處へ云つて來給へ、彼奴は僕には敵はないんだ  
から……鎌倉から持つて歸つたこの貝を皆な遣らうか、こんなに澤山拾  
つて來たから……」

花「ハイ難有うムいます……あの金魚のゐる盆石の山へこの貝を乗けて參

りませうか、然うすると大さう奇麗になりますから」  
空ッム僕も行くよ」

○藤子夫人思案顔、卓上の新聞紙など繰りながら

「……否、否、矢張私が正直なんだ、東郷さんの御病氣を托解に、屹度あの女の處へ泊り込んで入らしたのに違ひはない、左様だとも、如何に大切な方だと云つて、親兄弟ではあるまいし、病人の枕元へ晝夜詰り切つてらつしやるほどの縁もゆかりもないんだもの、屹度然うだ、屹度それに違ひない、益田さんなんか、恰當その日に薨者なんか引張つて鎌倉邊へ出かけてたんだもの、我夫も大抵定まつてるわ……それにしても、益田さんが私等の散歩してたのを何か譯のあるやうに釋つて入らした様子だが、忌らしい、誰がそんな……眞實に、誤解されちや迷惑だわ……オヤ、この新聞の欄外に、東郷大臣薨去の報が載つてゐる、機敏だねえ……反對黨の新聞だけれども丁重に書いてゐる事……オヤ……司法大臣令夫人の姦通……オヤ、二號活字で司法大臣令夫人

の姦通だつて……」身も手も慄るへ出す「まア眞實にとんでもない事を書くんだねえ……鎌倉の海岸を私と明さんとが散歩してたのを、元來二人は譯ある中で、前から姦通してたなんて、失敬な……失敬な……誰がこんな事を通じたのだらう……失敬な、實に失敬な……まア何んて云ふ事たらう、如何に記事に事を缺いたとはいへ、こんなぬれ衣を人に着せるなんて、まア失敬な……こんな失敬な事を……」新聞を噛み破つて、引裂いてすさまじく、憤怒の體。

○剛入來る

藤子漸く心附いて「オヤ、お歸り遊ばしましたか」

剛、平然として「汝は何時頃お歸りだつたか」

剛「ハイ、もう少し前に歸りました」

剛「愉快ぢやつたらうのう」

剛「エ、……唯見舞に参つたのでムいますもの」

剛「大分、御愉快だつたといふ評判だぜ、新聞に迄載つてゐたんだもの、

汝新聞を見たのだらう」

藤「ハイ……否え……今一寸と始めて見まして、あんまり馬鹿々々しい事が書いてありますので引裂いて了ひました」

剛「別に引裂くには及ばないぢやないか、引裂いたつて嘘が眞になるてはなし、眞が嘘になる譯もないんだからな」

藤「でもあんまりな事が書いてありますもの、何んの怨があるか知らないが、人を中傷すると云つてもあんまりてムいませすもの」

剛「中傷なんかする奴は、つまり自分を中傷してるのだから、中傷された者は平氣さね」

藤「だつて事に依りますもの」

剛「それは無論事に依つては其儘打捨つて置いても構はないし、又何處迄も詮索せんければならん事もあるが、藤さん、汝は他迄事實無根だと云ふのだね、全切、事實のない事だと云ふのだね」

藤「ハイ……事實無根でムいませすとも」

剛「ウム……慥かと然うか……」

○守雄駈来る

守「お父さん、僕は歸つて来たのよ」

剛「ウム、歸つて来たか、面白かつたかい」

守「僕は面白かつたわ、小田川の明さんと、お母さんと、僕と三人で鎌倉へ行つてね、大勢の漁師の子なんかと、海岸で遊んで駆け歩いたりなんかして、叔母さんの所で泊つて来たの、いろんな貝も拾つたのだし、明さんの繪も貰つたの、面白かつたわねえ、お母さん……」

藤「汝は彼方へ行つて歩いてなさい」

剛「明さんが汝を可愛がつてくれたのかい」

守「イヤ、僕は子供と許遊んでたもの、明さんはお母さんと一緒に海岸を散歩したりなんか、ねえお母さん」

藤「晝間は雪さんなんか一緒に散歩したのでムいます」

守「僕は子供なんかと一緒にね、海軍の演習をやつて遊んだの、お父さん」



東郷の叔父さんは死んぢやつたのてね、海軍大臣になる人が無いのねえ」  
剛「ウム……叔父さんはとうとう亡くなった、氣の毒な事だつたよ」  
守「ねえ、お父さん……ねえ……お父さん……僕は海軍大臣になり度いや」

剛「ハ、ハ、ハ、汝が海軍大臣になつたら日本も露西亞なんかに負けやしましよ」

守「何んの負けるものか、僕が伊東大將になつて、敵の奴を皆遣附け了ふは」

剛「ハ、ハ、ハ、汝も大人になつたら海軍大臣になるが善いよ、今少し用事があるから彼方へ行つておいで」

守「ハイ……あの後で、カステラを頂戴よ」

剛「邊を見廻し」藤子、私は反對黨の新聞の記事なんか軽々しく信ずるやうな男ではないが、汝は唯、汝の胸に聴いて見るが善いぞ、私が東郷君の大病の處へ詰め切つて、晝夜心を悩ましてゐる最中に、一體何ん

と思つて明なんかと鎌倉三界を遊び行いたんだ、汝なんか馬鹿にされて、黙つてすつ込んでるやうな卑屈な人間とは些と質が違ふぞよ、……不埒な奴めが」

藤子「貴方まア何を仰るのです、私は私の胸に聴いて見ても些とも身に後暗い事はありませんよ、貴方こそ、そりやア東郷さんの御病氣が御大切ではありませうけれども、然う詰切つてゐる様な縁もゆかりもある人ぢやアないではありませんか、何處へ行つて入らしたのか知れたものぢやアムいません、女だからと思つて、貴方はあんまり私を踏附にし切つて居なさるんだもの……」

剛「黙れッ、東郷君は我が内閣に取つては大切な人だ、日本の國家の爲めにも容易ならぬ恩人だぞ、その人の大病の處へ詰め切つてゐるのが何の不思議だ、汝は自分の胸に聴いて見ても少とも疼しくないと云ふのか、それでは汝の胸の鏡は情慾の火の爲めに黒焦げになつて、もう錆び附いて了つてるのだ」

藤王「貴方、まア何を仰やるのです……」  
 剛「白つばくれまい、此方には儲かな證人があるんだ、昨日鎌倉の海岸で、あの大藏大臣の益田君に出逢つたろう、エ、出逢はないとは云はせんど、あの新聞の記事を見て、益田君が私に忠告してくれたのた、海岸で白晝日中、まさか犬の様な舉動も出来まいとは思つたが、あの明といふ奴が生物知の、イヤニ西洋かぶれした一種のハイカラだ、何んな真似を仕出かすか知れた奴ぢやアない……」  
 藤王「貴方、あんまりな事を仰ります……」  
 剛「そんな事は兎に角、汝の精神が已に汚れたのなら姦通しないとは云はせんど、よくも私の顔へ泥を塗つたな、折角、これまで艱難辛苦して漸く今日の地位に經昇つた鬼頭剛の男も名譽も汝の爲に滅茶苦茶にされて了つたんだ、女子と小人は養ひ難しと云ふが、これ程までに淺果敢な奴だろうとは……チエツ、實に残念だ……」  
 藤王「それは貴方あんまりな仰やり様でムいます、私は決してそんな不義

いたづらをした覺はムいません、ハイ、決してそんな汚名を受ける覺はありません、昨日鎌倉へ参りましたのは全く叔母の病氣見舞の爲めて、決して明さんとそんな後暗い事のあらう筈はありません、ハイ、決してそんな覺はムいません……貴方は私にありもせぬぬれ衣を着せて、それを麻に私を追出して、後へ貴方の、舊の關係ある女を引入れるお心算なんてムいませう、ハイそれに違ひありません……」  
 剛「馬鹿なッ」  
 藤王「否え、それに違ひありません、私の身の明證は明さんを呼んで立派に立て、貰ひます、益田さんには寸時と出逢ひましたけれども、その時私は明さんが咳入つて渡邊へ倒れたもんですから、夫を介抱してたのでムいます、私には此指程も後暗い事はありません……」  
 剛「フム、それ程後暗い事のないものが、何故夫へ無斷で、他所へ寢泊りして来たんだ……それは私が悪うムいましたけれども、久し振りの事では

あるし、病人の叔母さんが今宵一夜さ丈は何うあつても泊つて行つてくれと云つて、離さないんですもの」

剛「フム、夫よりは叔母の方が大切だといふのか、然うだろう、そんな心掛だから夫の留守に我儘勝手な不埒を働いて歩くんだ」

藤「私は口惜うムいます、身に些とも覺えのない事を……貴方こそ、舊の情婦を何處かへ圖つて置いて、その方へ繁々通ひなさつたりなんか、私を邪魔物にして追ひ出さうと企んで居なさるのに違ひありません、ハイ、それに相違ありません、私はこんな口惜い事はムいませぬよ」

剛「馬鹿もの、そんな勘違の怪氣から、益田君なんかの目に迄も蒐るやうな、とんだ事を汝は仕出かしてくれただ、あの綾江といふ女はもう東京には居ないのだと、あんなに云つて聞せてあるのぢやないか、夫の言を信じないで、下らぬ女の廻り氣から、汝は悪魔に魅入られて了つたんだな」

藤「東京に居なければ、それでは何處に圖つてあるのでムいませぬ？ 夫

を貴方は何故私に打明けて云はれないんですか、眞實の夫婦の中に、隠立があつてよいものでムいますか、それから承り度うムいます」

剛「あの、女は……あの女はもう此世には居ないのだ、……私と一緒に死度いと云つて、私へ切り蒐つて來たのだが、今思ふと、そんなにまで私の事を思ひ詰めてゐてくれたか、男早魘もしない世の中に、そんなに命を捨てまでも私の事を一心に慕うてゐてくれたのかと、汝の不貞に引競べて、眞實に、あの女の事が、私は今更可笑さうで堪らなくなつて來るわ」

藤「エツ……此世に居ないつて、……まア何うしたのでムいます？」

剛「大きい聲では云はれないが、あの、關口の瀧の邊で私と一緒に死ぬと云つて、短刀で切りかゝつて來た途端、足を踏滑らして川の中へ陥つた限り……私に罪も咎もないのだから打明けて云つても善かつたのだが、これが世間へ發表されると、多少、内閣の威信にも穢はる事だし、死骸が上つたといふ事も聞かないから、まアそれ迄は誰にもと思つて、口外

しなかつたのだ」

藤子「エ、眞實に……」

剛夫婦の中に隠し合ふ秘密があつてはそれは素より紛擾の種になるのは知れてゐるが、國務を司る大臣となつて見ると、胸は二重底、三重底にもして置く必要がある、それを汝が淺果敢な、いろんな恠氣廻り氣で、こんな取返の附かぬ不名譽を私の額に極印打つてくれたかと思ふと、何うも残念で無念で堪まらない、云はゞ私は不貞な汝の爲に、あの貞節な女を殺したやうなものだ、汚れた愛を聖い戀と交換へたのだ……ア、婦女子なんかの爲めにこんな耻辱を取らうとは巳も知らなんだ……チエツ、何うしてくれやうか」

藤子「そんな事とは知りませんで……あの、それは眞實なのでムいすか？」

剛「婦女子なんか欺いてそれが何になる、嘘言許り吐くのは卑怯者の事だ」藤子「そんな事情があるうとは知らないで……いろんな恠氣嫉妬を出して」

眞實に私が悪うムいました、寧ろ早く私に丈は打明けて仰つて下さつたら、こんなに氣を揉まないでも済みましたもの、此度の事は何卒御許しなすつて下さいまし……」

剛「許すも許さんもない、もう汝なんかに未練はないぞ、……これ限離縁だ」

藤子「ア貴方、それはあんまりでムいます……あんまり酷うムいます、恠氣嫉妬はそりや私が重々悪うムいましたけれども、姦通なんてそんな汚らばしい事は私は少とも身に覺えがムいしません、鎌倉へ参りましたのも貴方が私の事を少とも構つて下さらないから、斯うしたら少しは心配して下さるか、彼あしたら家を明けたりなんかなさるまいかと、女の猿智慧ではムいましたらうけれども私は貴方と夫婦になりましたから、天にも地にも懸替のない人だと、それ許、朝夕心にかけてゐるのでムいすもの、ついあんな眞似も仕出かしたのでムいす、私の身に少とも後暗い事はありませんから何卒、これ迄の事は許しなすつて、末長う可」